

山鹿市立博物館調査報告第1集

# 城・下原遺跡

— 熊本県山鹿市大字城字下原所在・繩文時代後期遺跡の調査 —



1980

山鹿市教育委員会



# 序

山鹿市は、国指定史跡のチブサン古墳や、弁慶が穴古墳、さらには鍋田横穴群をはじめとして、多くの装飾古墳が存在することで内外に知られております。

菊池川流域に開花した装飾古墳文化。古墳時代の中においては、この装飾古墳文化はまさしく地方の文化とも言えるものでした。

しかし、この文化の発展の基礎には、先人から受け継がれた生活・文化があつたことを見逃すことはできません。

この報告書は、昭和54年度国庫補助事業として遺跡確認のための発掘調査を実施した城・下原遺跡の記録であります。

この遺跡は、山鹿市大字城字下原に所在する、縄文時代後期から晩期にかけての遺跡であることが判明いたしました。

本書が今後学術研究の一資料として活用され、さらに文化財の保存や、愛護思想の普及の一助になれば喜びに存じます。過去の文化を継承することによって、一層の文化の発展がなされるものと信じてやみません。

末筆になりましたが、本調査にご協力を賜わりました地主をはじめ、地元の方々に敬意を表し厚くお礼を申し上げます。

昭和55年3月31日

山鹿市教育委員会

教育長 弓掛正久

## 例　　言

- 1、本書は山鹿市教育委員会が昭和54年度国庫補助事業として実施した、山鹿市大字城所在の城・下原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、城・下原遺跡は耕作中に発見された遺跡で、今回の発掘調査は規模確認のための発掘調査である。なお調査については山鹿市立博物館が実施した。
- 3、本書の執筆は原口長之・中村幸史郎・倉原謙治が担当した。執筆分担は本文目次に記載することとした。
- 4、遺跡・遺物の実測図作成は挿図目次に示すとおりである。製図は田中理恵子があたった。
- 5、遺跡写真の撮影は中村幸史郎が、遺物写真は中村徹也があたった。
- 6、本書の編集は原口長之の指導のもとに中村（幸）と倉原があたった。
- 7、表紙タイトルは山鹿市教育委員会教育長弓掛正久による。

# 目 次

序	.....	(弓掛正久)
1 調査に至る経過	.....	(中村幸史郎) 1
2 遺跡の環境	.....	( リ ) 2
3 調査の概要と経過	.....	(倉原謙治) 5
(1) 調査団の編成	.....	5
(2) 調査の概要	.....	6
(3) 調査の経過	.....	8
4 遺構と層位	.....	(中村) 10
(1) 遺構	.....	10
(2) 層位	.....	15
5 遺物	.....	20
(1) 土器	.....	(倉原) 20
(2) 石器	.....	(中村) 37
6 まとめ	.....	( リ ) 44
あとがき	.....	(原口長之) 46

## 挿図目次

	頁
第1図 周辺の縄文時代遺跡と地形（中村幸史郎作成）	3
第2図 トレンチ配置図（倉原謙治実測）	7
第3図 E-5区遺構配置図（中村実測）	11
第4図 土塙実測図（〃）	12
第5図 C-17区平面図（倉原実測）	14
第6図 遺物出土状況実測図（中村実測）	14
第7図 予備調査区土層図（〃）	15
第8図 C-17区西側・東側・北側断面図（倉原実測）	16
第9図 B-11~13区西側断面図（中村実測）	17
第10図 第1トレンチ北側・西側断面図（〃）	18
第11図 第1・2グリッド断面図（〃）	19
第12図 耕作時出土土器実測図（倉原実測）	20
第13図 耕作時出土土器実測図（〃）	21
第14図 出土土器実測図（〃）	23
第15図 出土土器実測図（〃）	24
第16図 出土土器実測図（〃）	25
第17図 出土土器実測図（〃）	26
第18図 出土土器実測図（〃）	27
第19図 出土土器実測図（〃）	28
第20図 出土土器実測図（〃）	30
第21図 出土土器実測図（〃）	31
第22図 出土土器実測図（〃）	32
第23図 出土土器実測図（〃）	33
第24図 底部実測図（〃）	34
第25図 土製品実測図（〃）	35
第26図 第2次調査出土土器実測図（〃）	35
第27図 博物館敷地内出土土器実測図（〃）	36

第28図	扁平打製石斧実測図（中村実測）	38
第29図	扁平打製石斧実測図（〃）	39
第30図	削器実測図（〃）	41
第31図	尖頭器・石鎌・その他礫器実測図（〃）	42

## 図版目次

- P L - 1 遺跡航空写真
- P L - 2 ① 遺跡全景  
② E - 5 区溝状遺構発掘前
- P L - 3 ① E - 5 区溝状遺構発掘後  
② E - 5 区土塙
- P L - 4 ① 土塙内層序および集石  
② 集石拡大
- P L - 5 ① C - 17区土器出土状態  
② C - 17区土器出土状態(拡大)
- P L - 6 ① C - 17区石器出土状態(打製石器)  
② C - 17区石器出土状態
- P L - 7 ① B - 11~13区西側土層  
② B - 11~13区土層拡大
- P L - 8 ① 第1トレンチ全景  
② 第1トレンチ土層
- P L - 9 ① 発掘風景  
② 発掘作業員のみなさん
- P L - 10 ① 耕作時出土土器  
② 博物館敷地内出土土器
- P L - 11 ① 耕作時出土土器  
② C - 17区出土土器
- P L - 12 波状口縁を有する土器ほか

P L - 13 「X」文を有する土器ほか

P L - 14 無文土器、土製品ほか

P L - 15 ① 打製石斧

② 打製石斧

P L - 16 ① 削器

② 尖頭器ほか

## 1. 調査に至る経過

昭和53年5月13日、県立鹿本商工高校教諭、門司靖氏（現、蘇陽高校教諭）によって、山鹿市立博物館へ縄文式土器が持ち込まれた。

氏によれば、5月初め、山鹿市大字城字下原のたばこ畑を耕作中に出土したものを、鹿本商工高校の生徒が学校へ持参したことであった。

資料は、底部を欠損した状態の深鉢で、縄文晚期、山ノ寺式土器であることが判明した。（第14・15図）さらに、この周辺からは以前土偶が1個発見されているところから、<sup>①</sup>縄文後期から晩期にかけての遺跡の存在がうかがわれた。

たばこの収穫が終った8月8日～11日にかけて4日間、地主の承諾を得て、資料出土の畑を、出土状況および遺構検出のための調査を実施した。調査には門司靖氏をはじめとする鹿本商工高校考古学部と鹿本高校考古学部の生徒諸君の協力を得た。

この調査では、深鉢に関した遺構は検出されず、縄文晩期の資料の出土も見ることができなかった。なお、深鉢は口を伏せ、2個重なった状態で出土したという話であった。故に、鉢の底部の欠損は、すでに耕作中に行なわれたものと考えられる。また、耕作中に発見されるところから、この資料の包含層は比較的浅いものと察せられた。

このため、山鹿市立博物館では、遺跡の重要性および、耕作のための遺跡破壊の危険性を考え、遺跡の規模確認調査を実施することを計画した。

昭和54年1月11日、土地所有者と発掘についての話しを行い、昭和54年度事業として発掘調査を行うことに承諾を得ることができた。また「今年は小作に出すので、そちらとも話をしたい」とのことだった。1月13日小作の人とも話しを行い、「9月から秋野菜を作るので8月15日頃までには終了して欲しい」ということで合意に達した。

昭和54年6月8日、所有者へ、発掘届作成のために発掘承諾書捺印の依頼を行った折、発掘に関しては一切協力しないとのことで、その理由については明らかにされないままであった。館長自らの熱心な説得に対しても、かたくなに拒否を続け、理由についても不明瞭な点が多く見られた。博物館では発掘の目的など考慮した結果、当畑地での発掘

を断念し、周辺畠地の調査に主力を置くことを確認して、再度、畠地所有者の調査を実施した。その結果、当初予定した畠の東隣の畠と、その南側2枚の畠を予定した。

山鹿市および周辺の町では、台地上の畠作には、主としてビニールハウスによるスイカやメロンの栽培が盛んで、この城の台地にも、多くのビニールハウスが建てられている。このように、畠の生産性が高く、年中作物を作っている畠を、長期にわたる発掘で、休ませることが最も心配で、話合いに際しても、地元の世話人さんにお願いして、下話をしてもらい、その後博物館から出向いて主旨等について説明する、という方法をとった。世話人さんの熱心な説得のおかげで、所有者の方々から快く発掘の承諾を得ることができた。調査予定の畠は牧草地とスイカ畠で、これらの収穫後から、次の作物の作付けが開始されるまでの間を調査期間としなければならなかった。そのため7月中旬から8月下旬までの間とし、その間、畠の状況によって順次調査を進めて行くこととなった。

① 隈昭志・杉村彰一「熊本県山鹿市付城発見の土偶」『考古学ジャーナル』No14・1967

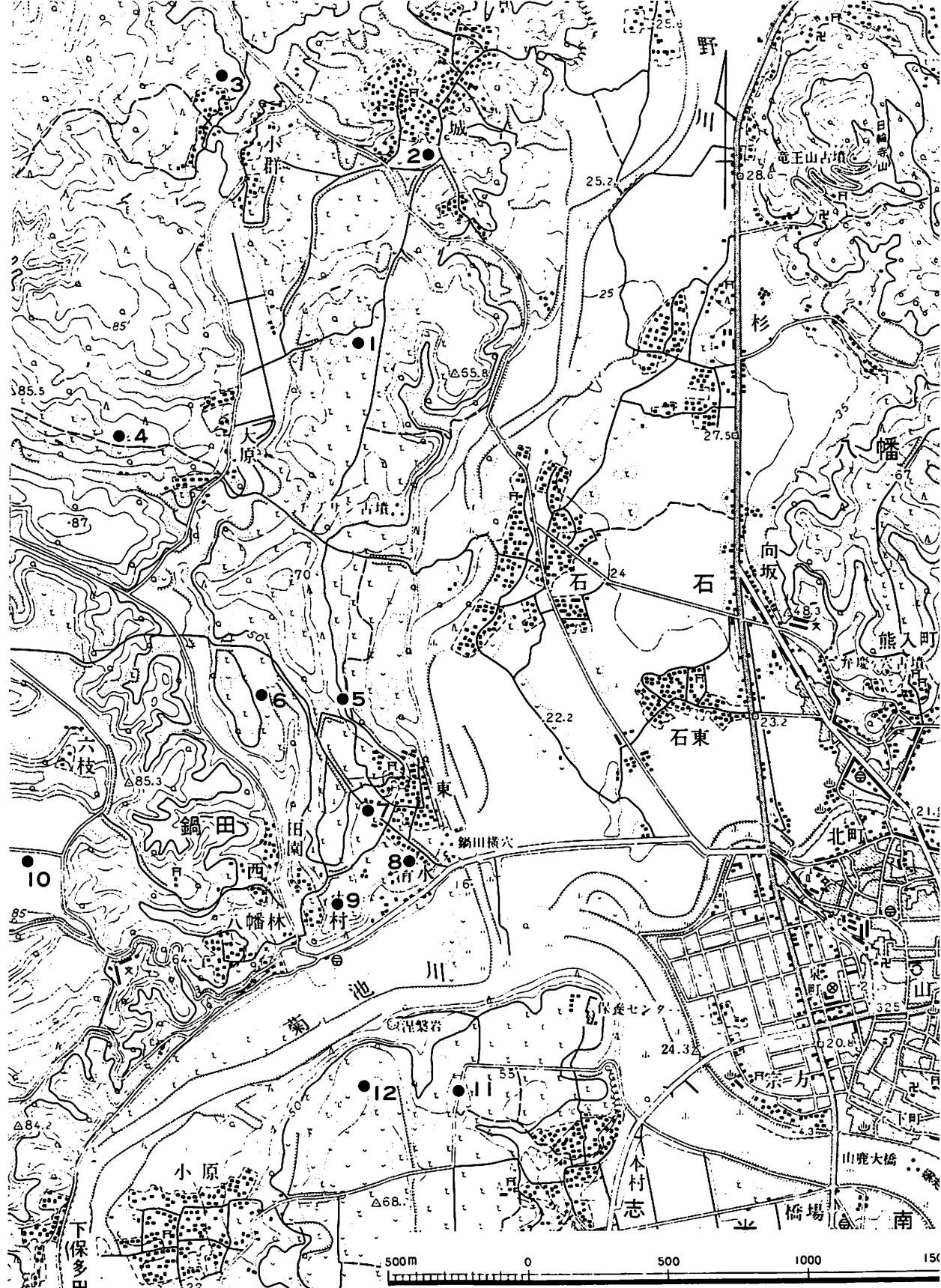
## 2. 遺跡の環境

川筋には、古くから文化が栄えると言われている。交通路としての川の役割り、又、食物を得る場所としての川、そして肥沃な土を運んでくる川。人々の生活に果たす役割りは計り知ることができなかった。

阿蘇外輪山西麓に源を発し、菊池から山鹿・玉名を通り有明海へと注ぐ菊池川も、同じく広大で肥沃な氾濫原を形成し、人々の生活に貢献して來た。

菊池市から山鹿市までの約16kmにわたる水田地帯は、県北部でも有数の穀倉地帯となっている。また、周囲を溶岩台地に囲まれていて、その西端に位置する山鹿市は、菊池川の支流が集中して流れ込んでいるため、梅雨の季節になると毎年水害に見舞われていた。

特に菊池川と支流の岩野川の合流点は台地の間に流れるため、菊池川の流れの中で最



1. 城・下原遺跡    2. 原口遺跡    3. 北原遺跡    4. 大原遺跡  
 5. 博物館敷地内出土地    6. 野中遺跡    7. 年ノ神遺跡    8. 東鍋田遺跡  
 9. 中村遺跡    10. 西原遺跡    11. 牛草遺跡    12. 原ノ山遺跡

第1図 周辺の縄文時代遺跡と地形

も狭くなっている。そのため今日においても氾濫の直接的原因となっているところである。

岩野川は、鹿北町岳間に源を発する川で、山鹿の市街地の西側を、台地沿いに南下している。この標高65mの台地が城台地で、その上に城・下原遺跡は立地している。

城台地には、国指定史跡チブサン古墳をはじめ、ウブサン古墳（市指定）、馬塚古墳（県指定）、さらに鍋田横穴群（国指定）、付城横穴群（県指定）、城横穴群（県指定）が見られる。これらの古墳の他にも各時代の遺跡が残っている。特に明治十年、西南の役に際しては、田原坂の戦いと共に激戦地であったことが知られている。

城・下原遺跡は、この城台地のほぼ中央に位置し、周囲には多くの縄文時代の遺跡を見ることができる。（第1図）

これらの遺跡は、主として縄文時代後期から晩期にかけての遺跡が多く、その殆どが標高50m以上の台地上に立地している。

このことは、平野部における河川の氾濫が多いことに原因しているものと考えられる。さらに、縄文時代後期に増大した遺跡の数から考え、台地上における生活基盤の確立をなしえたものと考えられる。

### 3. 調査の概要と経過

#### (1) 調査団の編成

調査主体	山鹿市教育委員会			
総括	弓掛正久（山鹿市教育長）			
調査責任者	原口長之（山鹿市立博物館館長）			
調査事務	轟木正斗（〃副館長）			
	次木万里子（〃事務吏員）			
調査員	中村幸史郎（〃学芸員）			
	倉原謙治（〃）			
作業員	戸上哲之介	大林雄二	塚本生雄	
	斎藤虎喜	上田キヨコ	志水ハルノ	
	中村キクノ	中尾清子	豊嶋久子	
	池田久香	野田光子	中原敬子	
	林田実子	坂本つたえ	古川実子	
	平野きよめ	竹下桂子	川崎五月子	
	猿渡美春	奥村久美子		
資料整理	緒方久美子	田中理恵子	原久美子	
	田渕喜美子	飯川早苗	木下美穂子	
	児玉智子	坂本由利子	中村徹也	
	最上敏	山城敏昭		
地元協力者	石貫孝弘	古山直喜	原浅吉	
	戸上久則	瀬口昭弘	大林竜喜	
	池田岬			
調査協力者	徳丸達也	大林陽朝	平山八郎	
	山鹿文化財を守る会	鹿本商工高校考古学部		
	鹿本高校考古学部	山鹿中学校考古学部		

今回の調査において、特に地元協力者の方々には、終始多大な御尽力をいただきました。ここに深く感謝の意を表し、厚く御礼申し上げます。

## (2) 調査の概要

〈予備調査〉 昭和53年8月8日～8月11日

山ノ寺式土器（深鉢）が出土した地点を中心に、1m×2mのグリッドを設定し、土器の埋蔵状態および遺構の検出につとめるが、出土した土器が地表よりかなり浅かったため検出することはできなかった。又、このグリッドより南約10mに第2グリッド、2m×2mを設定し、遺跡の規模確認を行うが、ここでも同様の結果しか得られなかった。

土層は6層に分かれており、北から南へ傾斜しているようである。

〈第1次調査〉 昭和54年7月24日～8月29日

予備調査区の南部に調査区を設定する。ここでは5m×5mのグリッドを組み、東から西へA～H、南から北へ1～25という記号を用いて区別することとした。又、調査区全域をカバーする意味から、主軸は磁北を用いずN-18°16'40"-Eにとることとした。

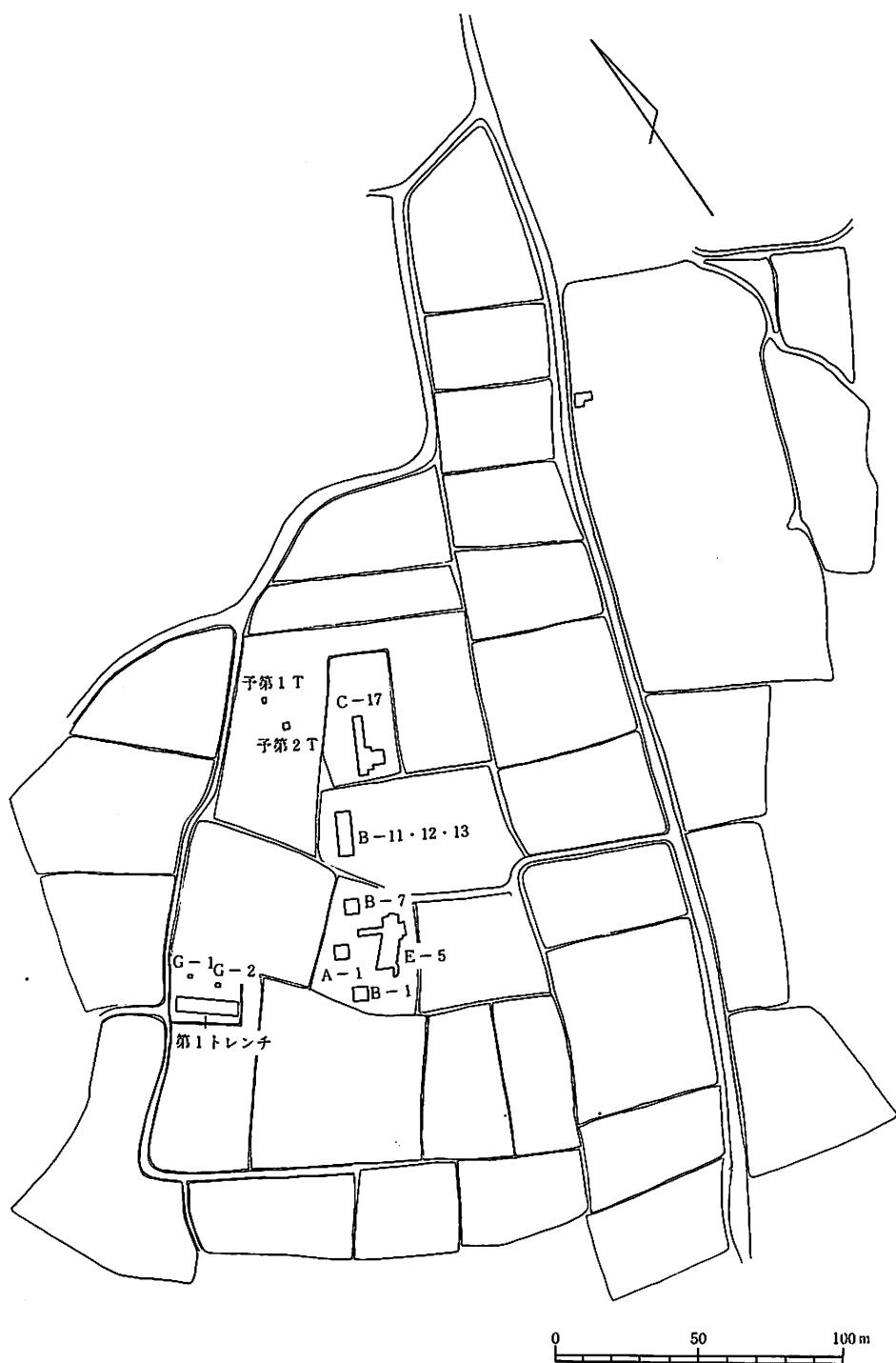
地区民からの聞き込みによると、この地域は最近まで桑園だったという事であるが、この話をうらづけるかのように、発掘が進むにつれて、桑木を抜根する際にできた層の乱れを確認することができた。これは調査区全域にわたっており、遺構が残存するのは皆無に等しいと思われた。ただD・E-4・5区において溝状遺構が検出され、その中には土塙も確認された。底には礫群を確認することができた。

〈第2次調査〉 昭和55年2月1日～2月9日

今回の調査は、攪乱されていない層位確認のための補充調査である。

前回調査の南西に調査区を設け、23.5m×4.5mのトレンチを設定する。ここでは耕作用の溝が東西に2本走り、又、これと交差して5本の耕作用溝が走っている。

包含層は第III層の黒色土層と思われる。しかし、この黒色土層は薄くブロック状に入っており、遺物の出土はみない。第IV層では赤褐色粘質土層で押型文、サヌカイト製尖頭器を出土している。



第2図 トレンチ配置図

### (3) 調査の経過

〈予備調査〉 昭和53年

- 8月8日 山ノ寺式土器（深鉢）が出土した畠を所有者の承諾を得て、鹿本商工高校・鹿本高校の協力を得て遺構の検出を行う。
- 8月9日 2ヵ所設定した試掘塙を掘り進めた結果、山ノ寺式土器に関連した遺構は何も検出できなかった。土層は、北から南に向って傾斜しているようである。
- 8月10日 試掘塙の調査。実測図作成終了。
- 8月11日 埋め戻しを完了し、調査を終了する。

〈第1次調査〉 昭和54年

- 7月24日 城字下原2690番地に10m×10mのグリッドを設定する。主軸はN-18° 16' 40" -E にとる。又、山鹿中学校考古学部の協力を得て表面採集を実施する。
- 7月25日 本日から本格的な調査を開始し、B-1・7区およびE-5区の表土剥ぎを行う。出土遺物は西平系の壺の頸部および肩部が主として見られるようである。
- 7月26日 E-5区において黒色土層の遺構が長さ5mにわたって確認される。この遺構は、竪穴住居もしくは溝状遺構が考えられ、遺物は後期のものが多く見られるようである。
- 7月27日 発掘調査結団式を朝9時より挙行する。昨日の遺構追求のためC-5・D-5区を幅2mにわたり拡張、又、D-3・4区、E-3・4区の拡張も合せて行う。これにより遺構は溝状の広がりを見せるようである。
- 7月28日 溝状遺構の追求に全力を投入し、各グリッドごとに発掘していたものを一体化する。遺構は長さ約20m、最大幅3mにわたっていることが判明。
- 7月31日 溝状遺構内の発掘にとりかかる。これにより溝の中心部に長さ5m、幅2.2m深さ約50cmの土塙を検出する。又この土塙の底には黒色土層でつつまれるような状態で礫群が確認される。
- 8月1日 溝状遺構の露出作業を一応終了し、調査区を北の畠に設定（B-11・12・13区）する。あわせて地形測量を開始する。
- 8月2日 溝状遺構全体を50分の1で実測、又、地形測量は1000分の1。

B-11・12・13区においては、竪穴住居の一部と思われる遺構が検出され、その外側にはピットが見られるためほぼ確実であろう。

8月3日～14日 調査の主体をC・D-17区に移し、発掘を進めたところ、多数の土器片を検出する事ができた。

8月15日～17日 盆のため調査休務。

8月21日 C, D, 17区の調査を続行しながら埋戻しにかかる。

8月29日 午前中で埋戻しを終了する。

〈第2次調査〉 昭和55年

2月1日 下原2693-1番地に東西23.5m、南北4.8mのトレンチを設定、調査を開始する。現場は一面の銀世界でかなり寒い。

2月2日 昨日確認されていた黒色土の露出作業に重点をおき、作業を進めていった結果、東西にはしる2本の攢乱された溝を確認する。この溝は桑の木植樹のために掘られたものである。又これとは別に南北にはしる同様の溝が確認され、これにより黒色土は格子状に切られている事が判明した。

黒色土の厚さは5～10cmと薄く、黒色研磨土器1点を検出した。

2月5日 トレンチの北側に2つのグリッドを設定、G-1・2と呼ぶ。G-1で第III層がレンズ状でのみ発見されており、すでに破壊されている可能性を考えられる。又、G-2においてはIV層下面において掘り込みが見られ、土層もIV層とV層の間においては不整合面が見られる。これが自然的なものか人工的なものかは確定しない。

2月6日 昨夜からの冷え込みは今冬最低を記録、現場一面は霜でおおわれていた。  
トレンチ内からは縄文後期の土器や、サヌカイト製尖頭器が出土する。

2月7日 トレンチに関する発掘作業、及び実測図作成完了。埋め戻し作業にとりかかる。

2月9日 午前中で埋め戻しを完了し、午前中をもって調査を終了。

## 4. 遺構と層位

### (1) 遺構

今度の調査で縄文時代の遺構として確認されたものは、わずかにE-5区の溝状遺構および、土塙だけであった。（第3図）

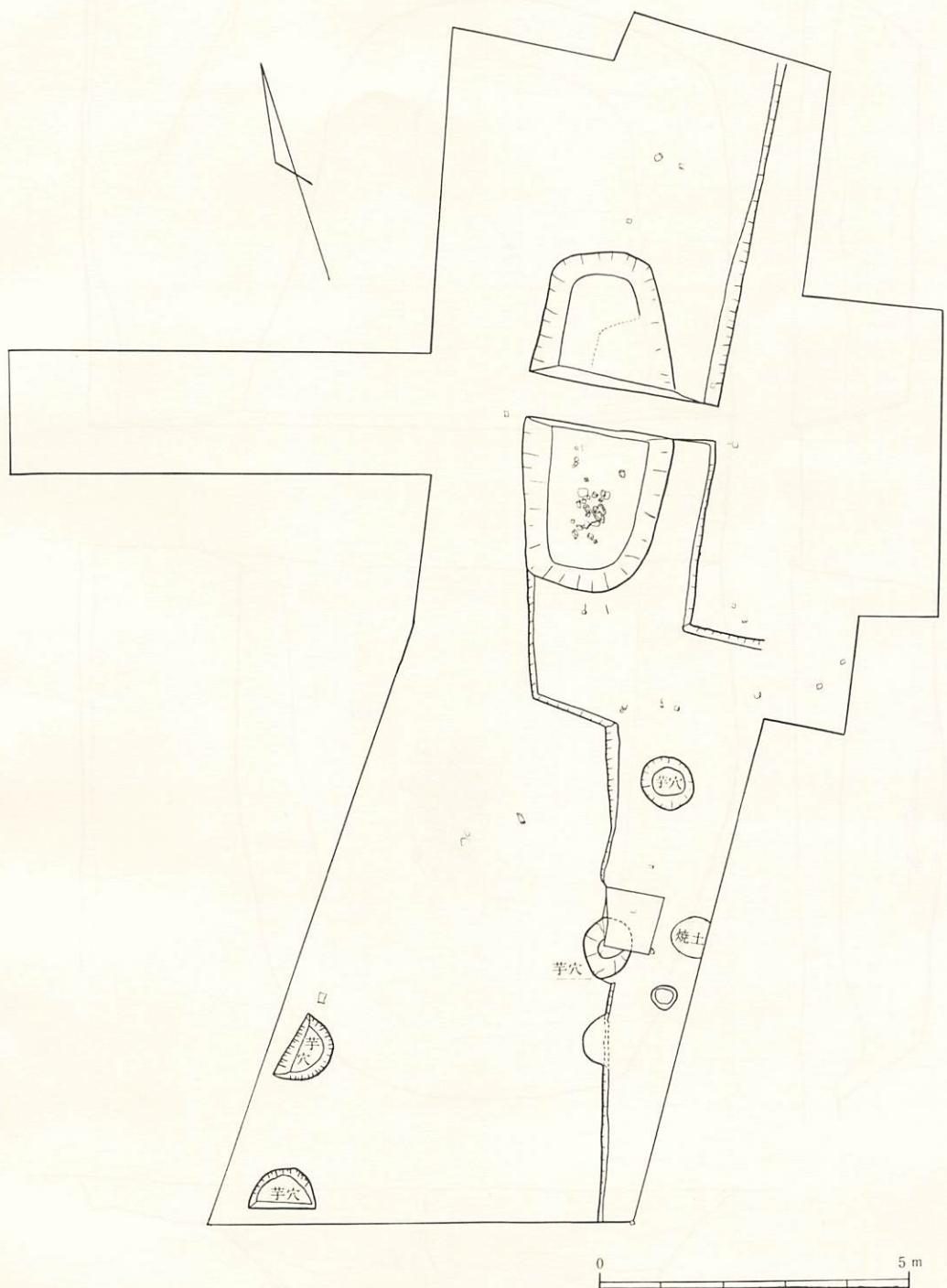
この地区は、他の地区に比べて攪乱が少なく、上層をいくぶんカットされただけの状態であった。また、牧草地として利用されていたため、耕作による破壊は見られなかつた。

南北に延びる溝状遺構は、わずか15cm程の深さである。さらに溝の落ち込みは、片側が不明確で把握できなかった。そのため、幅などについては明らかでない。なお、溝内には土塙が構築されており、その規模は長さ 5.2m、幅 2.4m、深さ 0.7mを測る。この土塙の南側で、溝は東側に向っており、さらに南へと続いている。ここで焼土を確認することができた。溝状遺構内外にピットが見られるが、これは現代の芋穴であった。

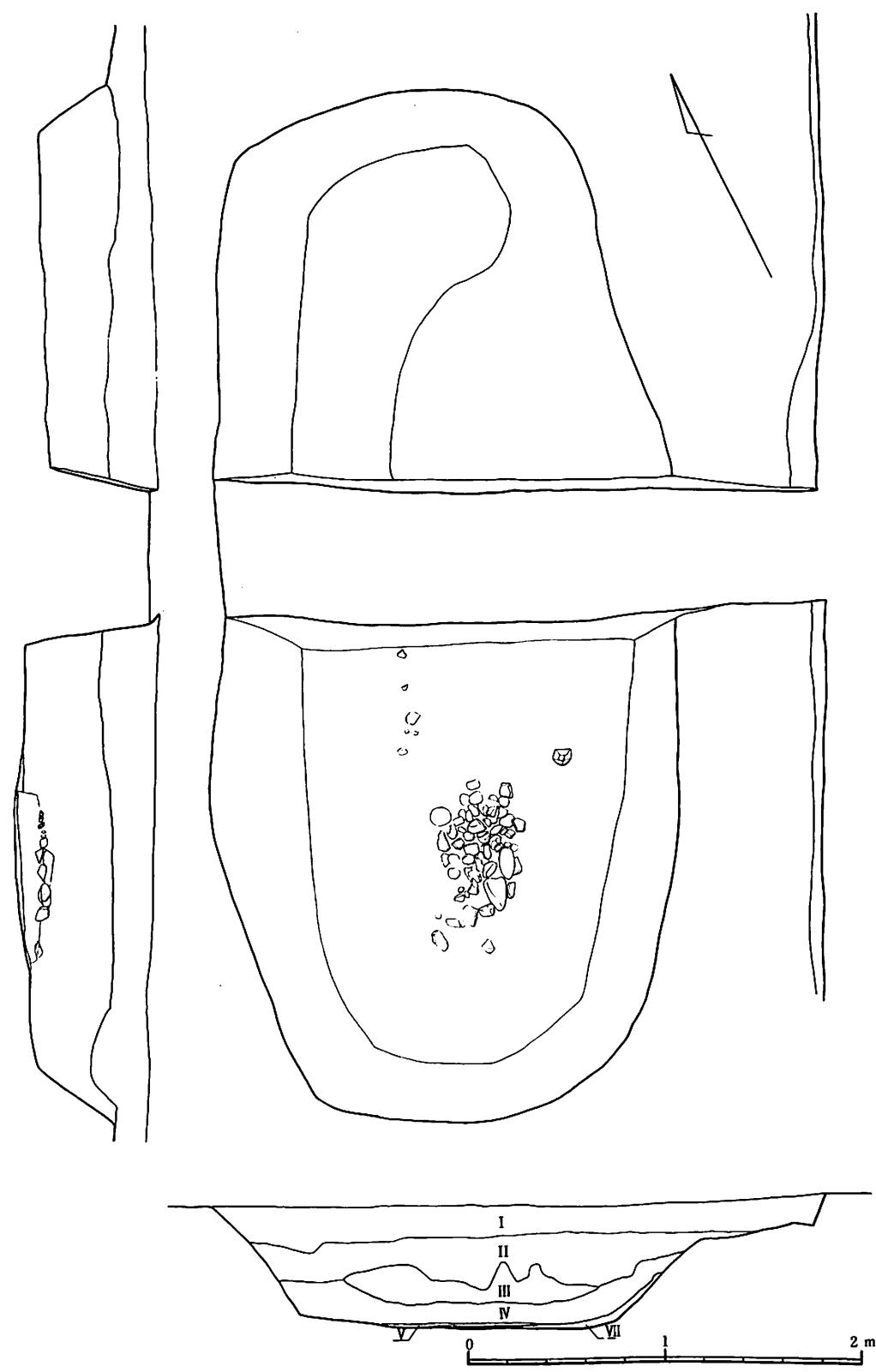
遺物の出土状況として、溝内より多く縄文後期の土器が出土している。このことから、この溝の時期は、縄文後期に比定できるであろう。なお、溝の性格としては、焼土も確認されていることから、少なくとも排水路とは考えにくく、住居跡との関係が十分考えられる。土塙については、土塙内土層断面（第4図）から次の事が考えられた。

- ①VI層とV層は、土塙が作られて間もなく堆積した層で、VI層は、東側斜面にそつて流れ込んでいる。
- ②IV層は斜面から流れ込んでいて、自然堆積と考えられる。
- ③III層は下面においては整合面を有しているが、上面においては不整合面となっている。このことは、III層の堆積後、II層堆積までに時間がかかったものと考えられる。もしくは、人工的なものが加えられたものと考えられる。
- ④II層は均等に堆積しているが、土質が、褐色土混入黒褐色土層というような土層で、他の地域では見ることのできない層となっており、自然堆積層では、このような土層にはなりえず、人工的な層と考えられる。

以上のことから、土塙が作られ、少なくとも第III層が堆積される時までは、この姿をとどめており、第II層の時期において埋められたことが推察される。このことは、とり



第3図 E-5区遺構配置図



第4図 土塙実測図

もなおさず、土塙の性格としては、墓地などの様に短時間に埋められてしまうものとは異なって、住居等生活に密着し、活用された遺構と考えられる。

さらに、土塙内の状況から次の事がうかがわれた。

- ①土塙の底は、北から南へと傾斜している。
- ②集石および、土器片の出土が限られた場所（集まった状態）でのみ、検出されている。
- ③集石の中からは、1かけらの土器片も出なかった。
- ④集石および土器片は、土塙底よりいくぶん上の層（V層）より出土していた。

これらのことから、先に述べた流れ込みの層内においても、集石や、土器片が流れ込んだ場合には、他の所からも出土することが考えられ、集石内にも土器片が混入する可能性が生じて来る。しかし、この土塙内においては、今述べたような状況であり、少なくとも、集石および土器の放置には、人の力が加えられたものと推測される。

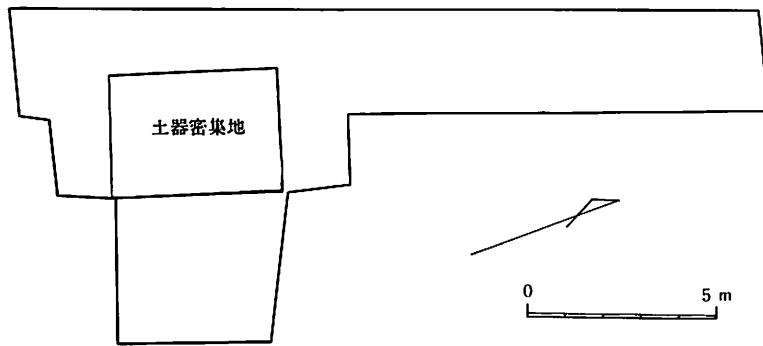
ただし、土塙を構築した時期と、集石や土器を置いた時期との間には、出土層位から多少の開きがあるものと考えられる。ということは、この土塙の性格と集石の意味するところは、多少異っており、切り離して考える必要があるだろう。

福岡県井手ノ原遺跡においても同様の土塙が見られる。時期的には中世の資料だが、<sup>①</sup>形態的には非常に類似しており、共通性を見ることができる。

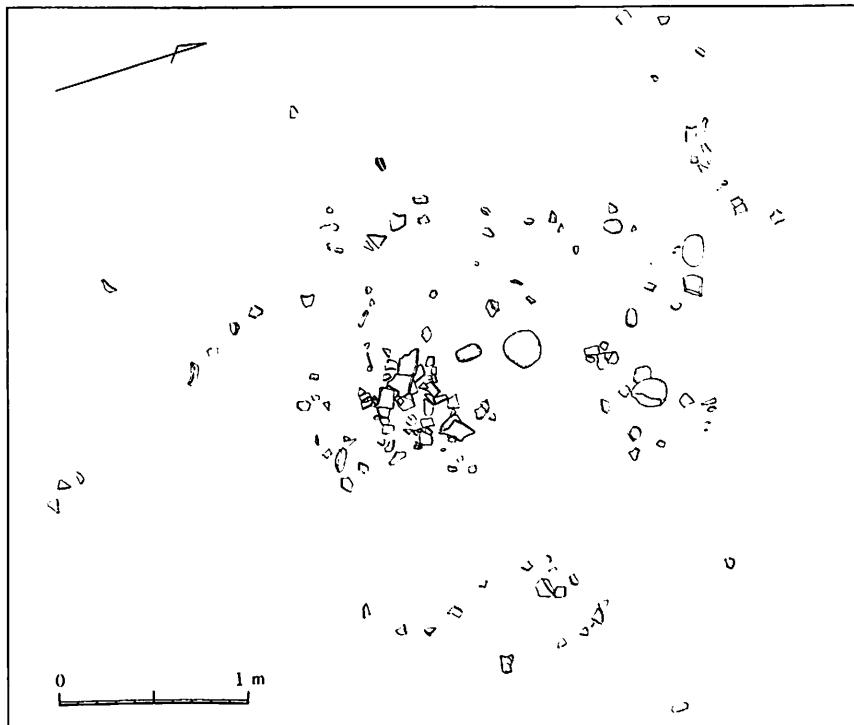
溝状遺構内に焼土が確認されているところから、排水路ではなく、恐らく住居跡に附属した貯蔵穴であろうと考える。

なお、この地区は作付けの関係で、溝状遺構関係の追跡調査ができずに、次の畠の調査へと進めていったため、十分な調査はできなかった。幸い、この畠はあまり荒らされていないところから、今後機会があれば、再度調査を実施したいと考えている。

①井上裕弘「井手ノ原遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集1976 中世の小形竪穴として取り扱われ、貯蔵穴であろうと述べている。



第5図 C-17区 平面図



第6図 遺物出土状況実測図

#### C-17区（第5・6図）

今回の調査で出土した遺物の過半数は、ここから出土したものであった。特に第5・6図で示すように土器の密集地が確認できた。しかし、この部分はきわめて狭く、他の所は攪乱を受けているため、たとえ遺物が出土したとしても、散在した状態で検出されている。かろうじて残っていたと言っても過言ではない状況である。そのため、これらの遺物に関連した遺構は残されておらず、単に遺物の出土状況だけを、確認できたにすぎなかつたことは、非常に残念である。攪乱については、層位の項で述べてみることとした。

## (2) 層位

予備調査においてすでに6層にわたる堆積が確認されていた。(第7図)この堆積が遺跡の基本層序となっていると思われる。

第I層 表土層 サラサラとした感じの土壤である。耕作のため厚みは不均等約30cm。

第II層 褐色土層 固くしまった感じのする土壤である。土器が包含されている。

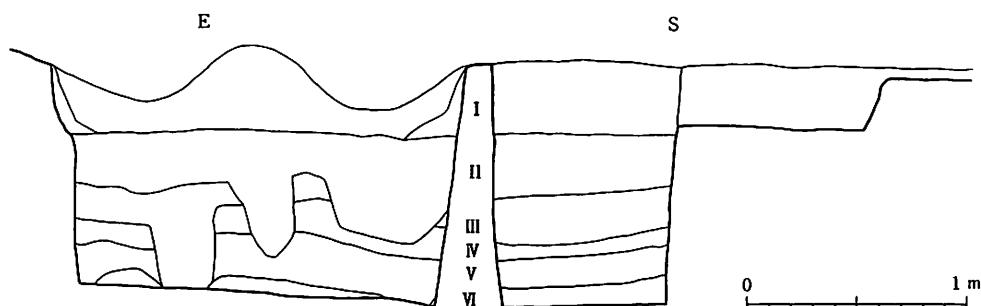
第III層 黒色土層 粘性の強い層である。(包含層…縄文後期) 20cmの厚み。

第IV層 褐色土層 粘性が強い土壤である。約10cmの厚み。

第V層 黒褐色土層 比較的粘性が強い土壤である。約20cmの厚み。

第VI層 黄褐色粘質土層 地山層となっている。小さな石粒を含む。

特に山ノ寺式土器(第12・13図P L10・11)が出土した層としては、III層において後期西平式土器を出土するところからII層であろうと推察している。そしてIII層(黒色土層)がほぼ全域にわたって見られ、さらに後期の資料をも出土するところから、III層の時期としては縄文時代後期としてさしつかえないだろう。

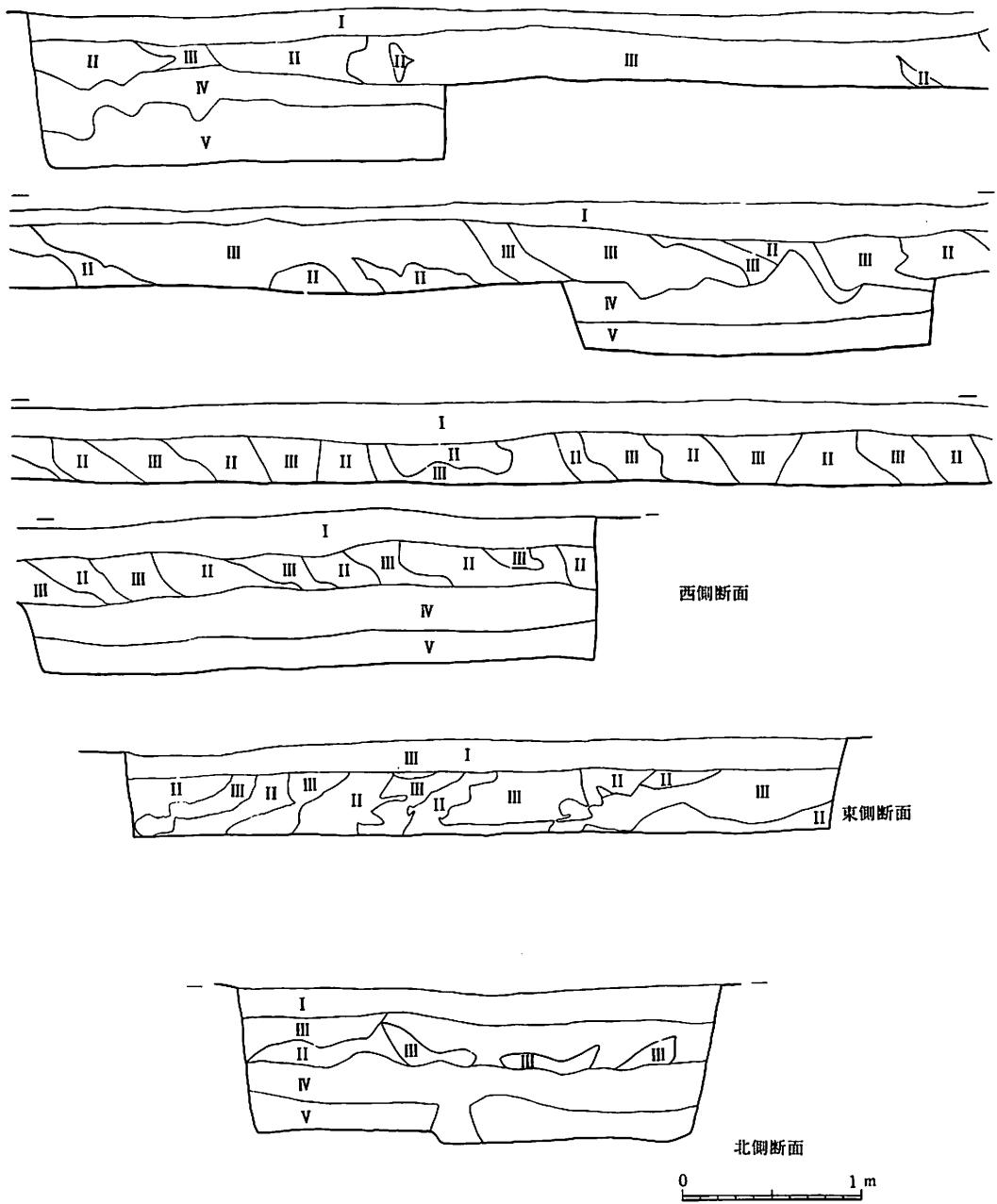


第7図 予備調査区土層図

## C-17区(第8図)

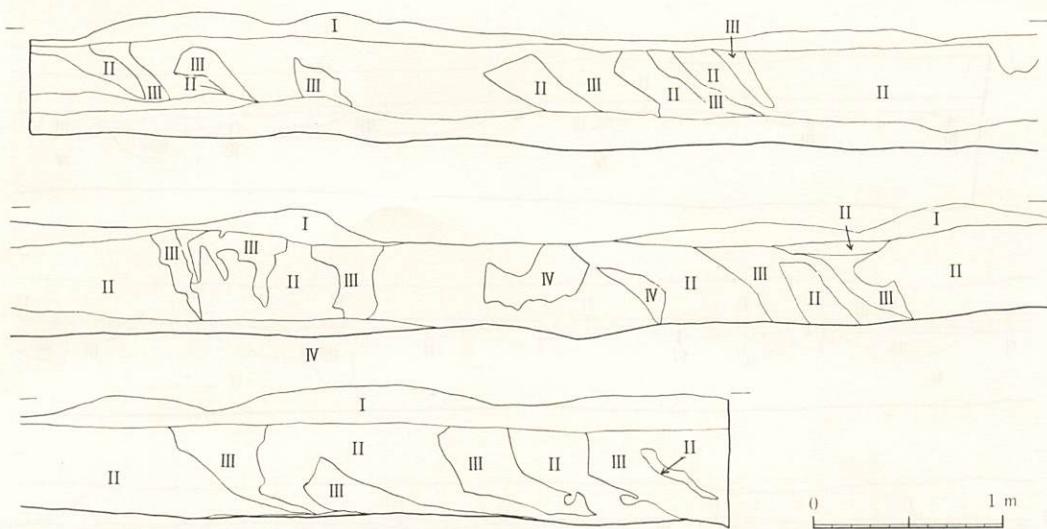
西側断面において、第II層と第III層との著しい攪乱を見ることができた。北側断面図においても同様の変化が見られ、さらに東側断面においてもしかりであった。

これらから、第II層と第III層の攪乱はかなり広範囲にわたることがうかがわれる。特にここで見られるように、縦の層の変化ということは、考古学的立場から考えて明らかに人工的なものとしか考えられなかった。



第8図 C-17区 西側・東側・北側・断面図

この攪乱はIV層までは達しておらず、地表下40cm程度のものである。また土層断面から東西に延びる帯状の層位の変化となっていたことがうかがわれた。このためC-17区においては遺物が部分的に出土しているが、これらの遺構については検出できなかった。また、第III層の黒色土層はこの地区のほぼ全域にわたって攪乱されているところから、晩期山ノ寺式土器関係の遺構は望めないという考え方でこの地区の調査を打ち切った。



第9図 B-11~13区 西側断面図

#### B-11~13区（第9図）

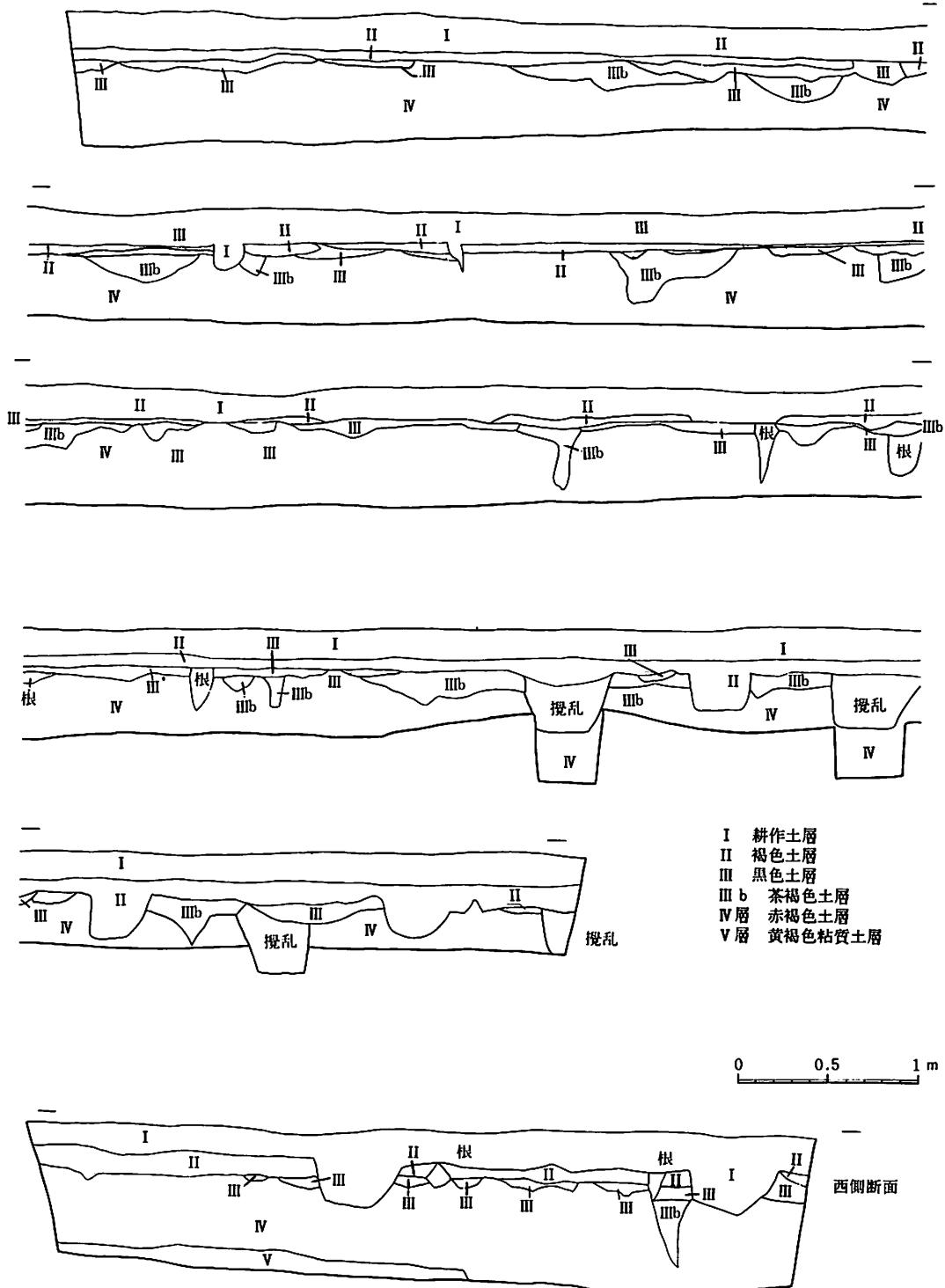
予備調査地区およびC-17区より一段下りになったこの地区は、ビニールハウスが連らなっていたため、長さ15m、幅5mの地域に限って発掘を実施した。調査を開始して層位の乱れが特異であるのにあっけにとられた。土層が縦に堆積していたのである。溝状遺構地を調査したその直後に、これだけの層の乱れがあるのには愕然とした。明らかに攪乱されていたのである。それまで、遺跡は未だ攪乱を受けていないと確信したにもかかわらず、攪乱は地表下60cmにまで達しており、II層・III層が完全に移動した状態で検出された。さらに、この変化は東西方向に延びているように観察された。

調査終了後、地主さんからブルドーザーを入れたとのことを聞かされたのは何とも皮肉な話であった。

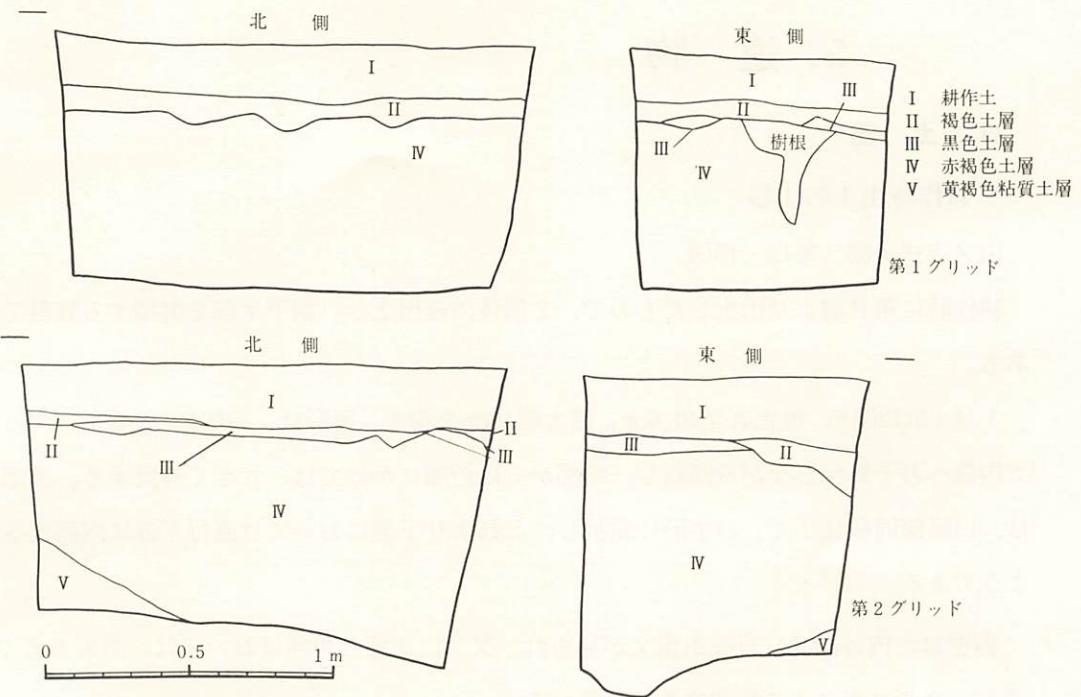
#### 第1トレンチ（第10図）

予備調査地区により100m離れたこの地に、25m×4.5mのトレンチを設定した。層序は基本的には予備調査区と同じであった。ただし、層の厚味に多少の差異を認めることができる。しかし、これは地区が離れているために生じたものと理解された。トレンチ内は耕作用の溝が東西に2本、トレンチ東端に南北7本を見ることができた。なお、第IV層内より押型文土器（第26図211）を出土している。さらにサヌカイト製尖頭器（第31図24・PL16）も出土している。

この地は桑畠となっていたため、土層内に根による層の乱れが確認された。しかし、C-17区やB-11~13区のようにブルドーザーによる攪乱は受けていなかった。



第 10 図 第 1 トレンチ 北側・西側断面図



第11図 第1・2 グリッド断面図

#### 第1グリッド（第11図）

第1トレーナーの北側に  $2\text{m} \times 1\text{m}$  のグリッドを2カ所設定した。そのうち西側のグリッドを第1グリッド、東側のそれを第2グリッドとした。

層序は基本層序と大差はないが、第III層（黒色土層）がレンズ状に堆積しており、第IV層がきわめて厚く堆積していた。また第V層の黒褐色土層は見られなかった。第IV層内より口縁部に刻目を施し、さらに刻目凸帯を有した資料を（第26図 213）出土している。

#### 第2グリッド（第11図）

このグリッドでは、第III層が薄く堆積していた。それに比べ第IV層はきわめて厚く、特に第IV層下面においては、不整合面となり、ピットを確認した。

第IV層から押型文土器（第26図 212）を出土しているところから、押型文の時期に比定できるピットと考えられる。

## 5. 遺 物

### (1) 土 器

#### 耕作時出土の土器

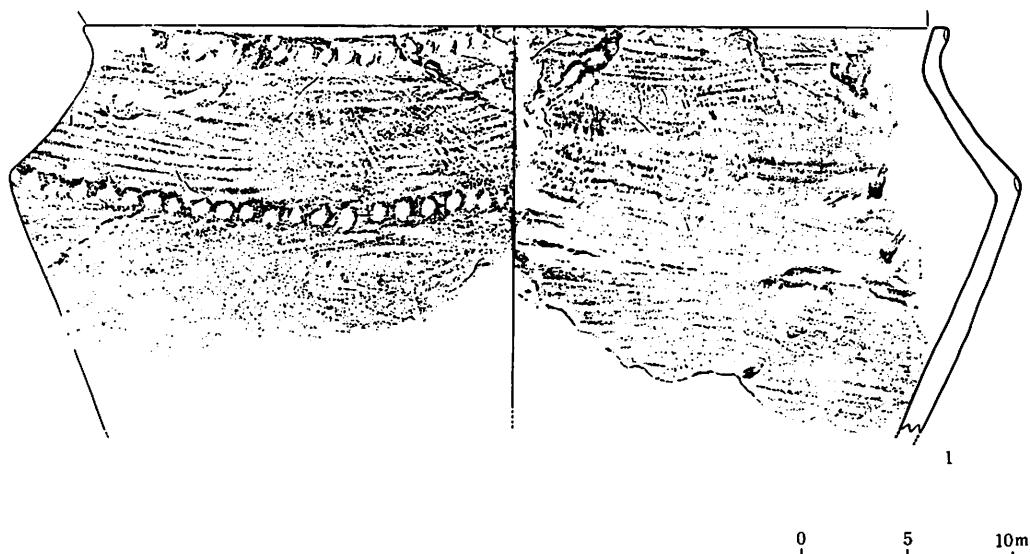
##### 山ノ寺式土器（第12・13図）

耕作時に第II層より出土したもので、2個体のみ出土し、胴下半部を欠損する資料である。

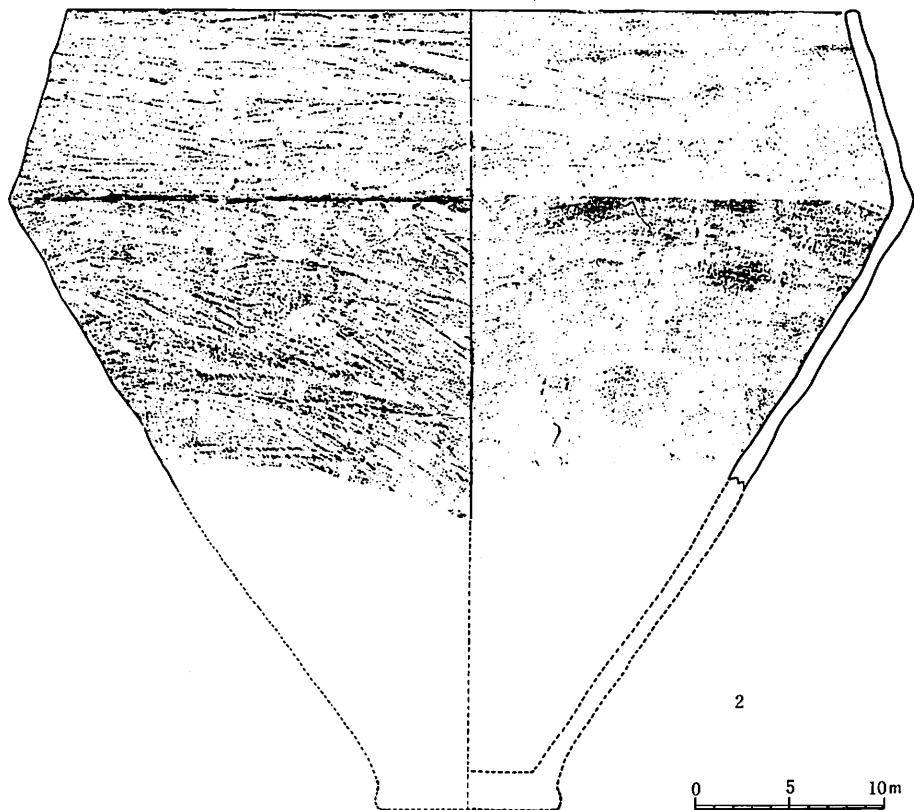
1は（第12図）、復元直径40.6cm、最大幅48cmを測る。器形は、肩部から口縁部に向って内側へ若干外反しながら傾斜し、頸部から口辺部にかけては、大きく外反する。肩部は、口縁部同様に「く」の字形に屈折し、これより下部においては直行ぎみに内斜するようである。

器壁は、内外面共に貝殻条痕文が見られ、又、口辺部と肩部においては、凸帯をめぐらし、さらに指による指突文を施している。

2は（第13図）、復元直径42cm、最大幅48cmを測る粗製土器である。器形は、肩部から口縁部にかけて内側へ直行ぎみに傾斜し、又、肩部より下部においても同様に内斜して底部へ向うようである。肩部は「く」の字形に屈折する。器壁表面は、全域に貝殻条痕文を施し、内面では、口縁部から肩部にかけて見られるようである。



第12図 耕作時出土土器実測図



第13図 耕作時出土土器実測図

#### 調査時出土の土器

城・下原遺跡から出土した土器の大半は、縄文時代後期に位置付けられるものである。これらの土器は前記層位の所でも述べたとおり、人為的に攪乱された層中より出土したものばかりである。この土器を、層位によって分類することは、非常に困難な事である。したがって ここでは有文・無文に大別し、それぞれを器形の部位、文様の類似等によって下記のとおり分類してみた。

#### 有文土器

I 類 平坦な口縁を呈するものである。

波状口縁の部に属するが、小片のため判別不可能なものもこれに入れた。

- a) 2条の沈線を有し、2カ所に磨消縄文がみられるもの。
- b) 2条の沈線を有し、1カ所に磨消縄文がみられるもの。
- c) 2条の沈線を有し、磨消縊文をみないもの。
- d) a・b・cとは異った文様を呈すもの。

II 類 波状口縁を呈するもので、詳細についてはI類a・b・c・dと同様である。

III 類 壺型土器の胴部である。

### 無文土器

I 類 口縁部。

II 類 脇部。

底 部

### 有文土器（第14～19図）

I - a 類（第14図3～18）

口縁部に2条の沈線を有し、中央を除いた上下間に磨消繩文を施すものである。器形は、全体的に酷似し肩部から口縁部にかけては直行しながら内斜する。ただ内壁で口唇部下部の立上がりにおいては、ある程度直行するもの（3・4・8）、ゆるやかにカーブを描くもの（5～7、9～12、14、16～18）、角を持つもの（13・15）の違いは見られるようである。

I - b 類（第15図19～30）

2条の沈線を有し、1条の磨消繩文を施すものである。器形についてはI - a 類と相違は見られないが、この中にあって28は口縁部がゆるやかに外反し1条の沈線を有している。

I - c 類（第15図31～41）

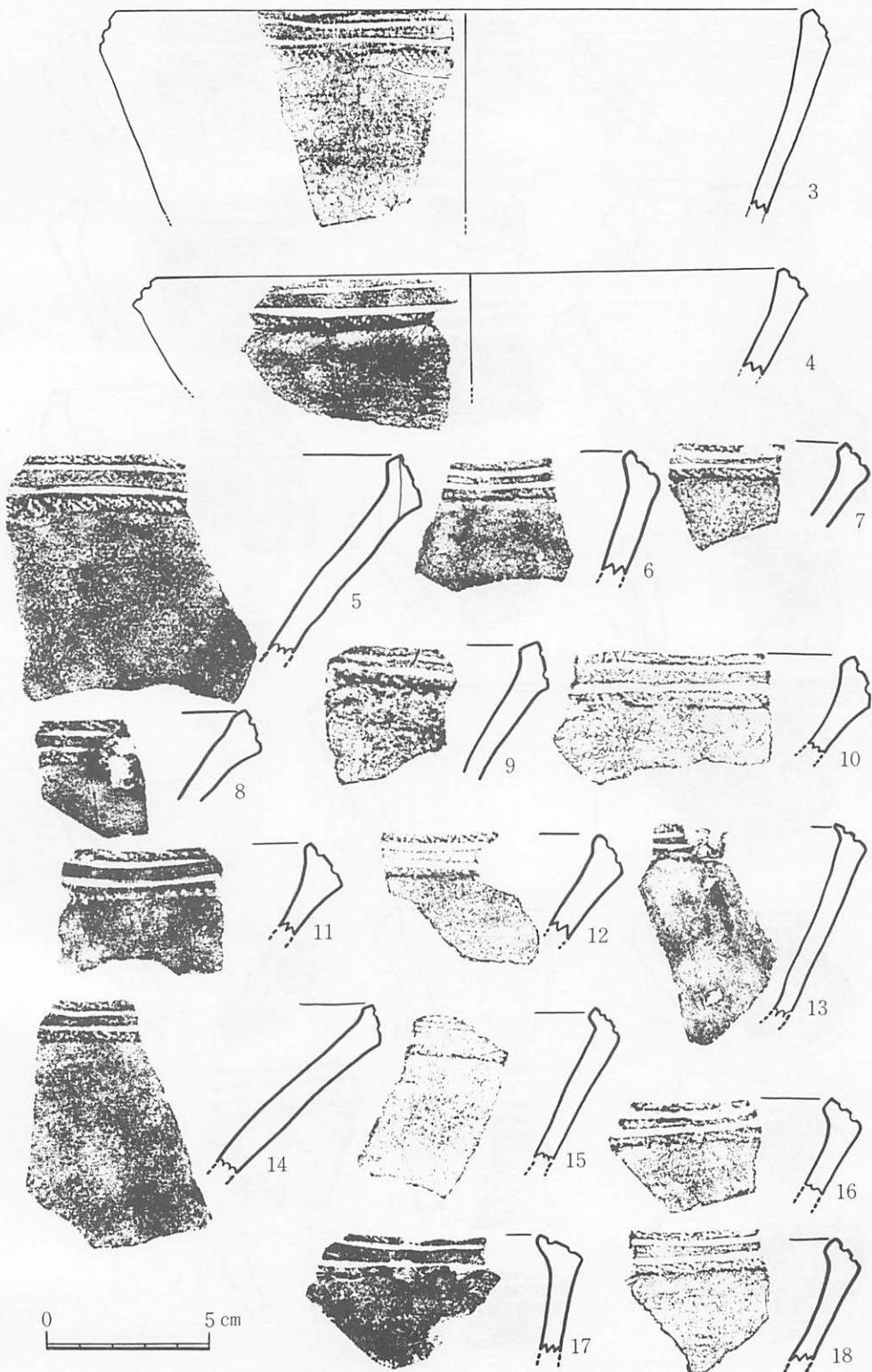
2条の沈線を有するが、磨消繩文を施さないものである。31は、図示復元したものであるが、直径16.2cmを測る壺型土器で器厚6～9mmを測る。口縁部は直行ぎみに外斜する。

I - d 類（第16図59～67）

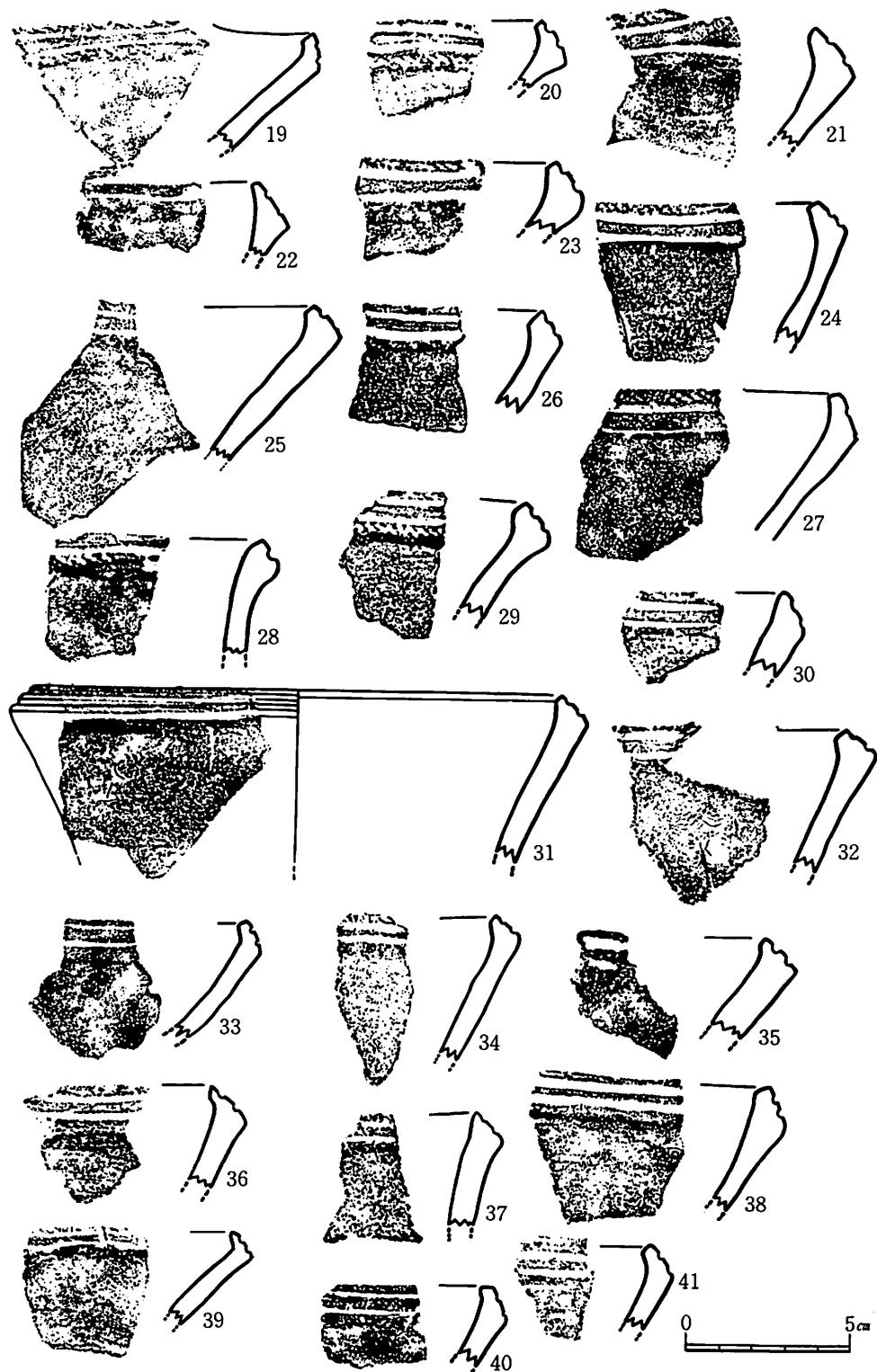
前記3タイプとは多少異った文様形態を持つ土器群で、出土数はごく少数である。

59は、口縁部が直行ぎみに外斜し、全域を磨消繩文で覆い、沈線はない。60・61は口縁部外壁に数条の沈線を施す粗製土器である。

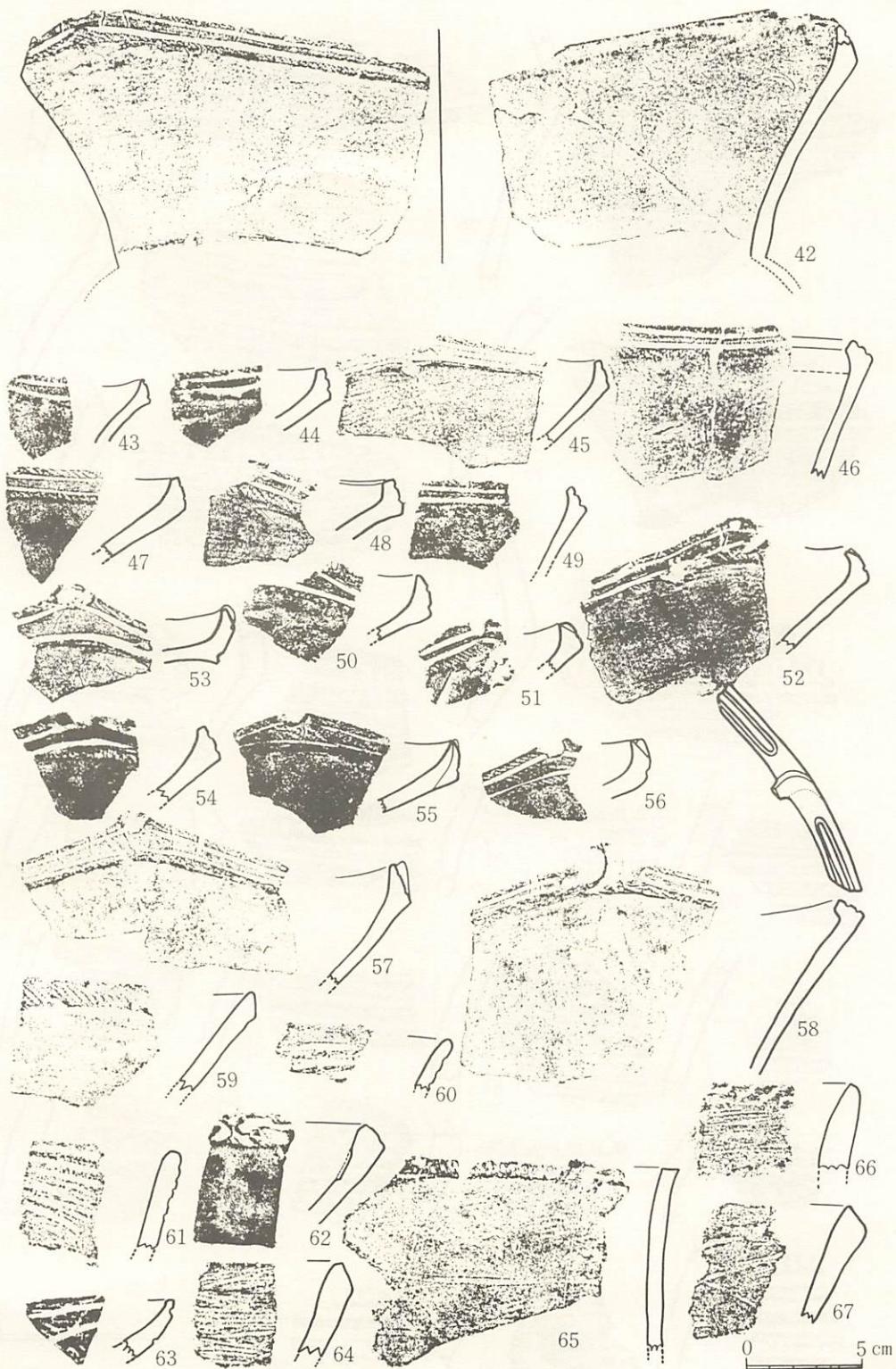
62（PL12-3）は、口縁部に「x」文を施す。63（PL12-4）は、口縁部全面に左上から右下に浅く、幅広い櫛目文を施し、その上から平行の沈線を描いている。65（PL12-5）は、口縁部がほぼ垂直に立ち上り口唇部直下においてわずかに外反する。口唇部は角ばり、全面に磨消繩文を施す。一部に突起をみることができる。又、外壁においては沈線を有す。



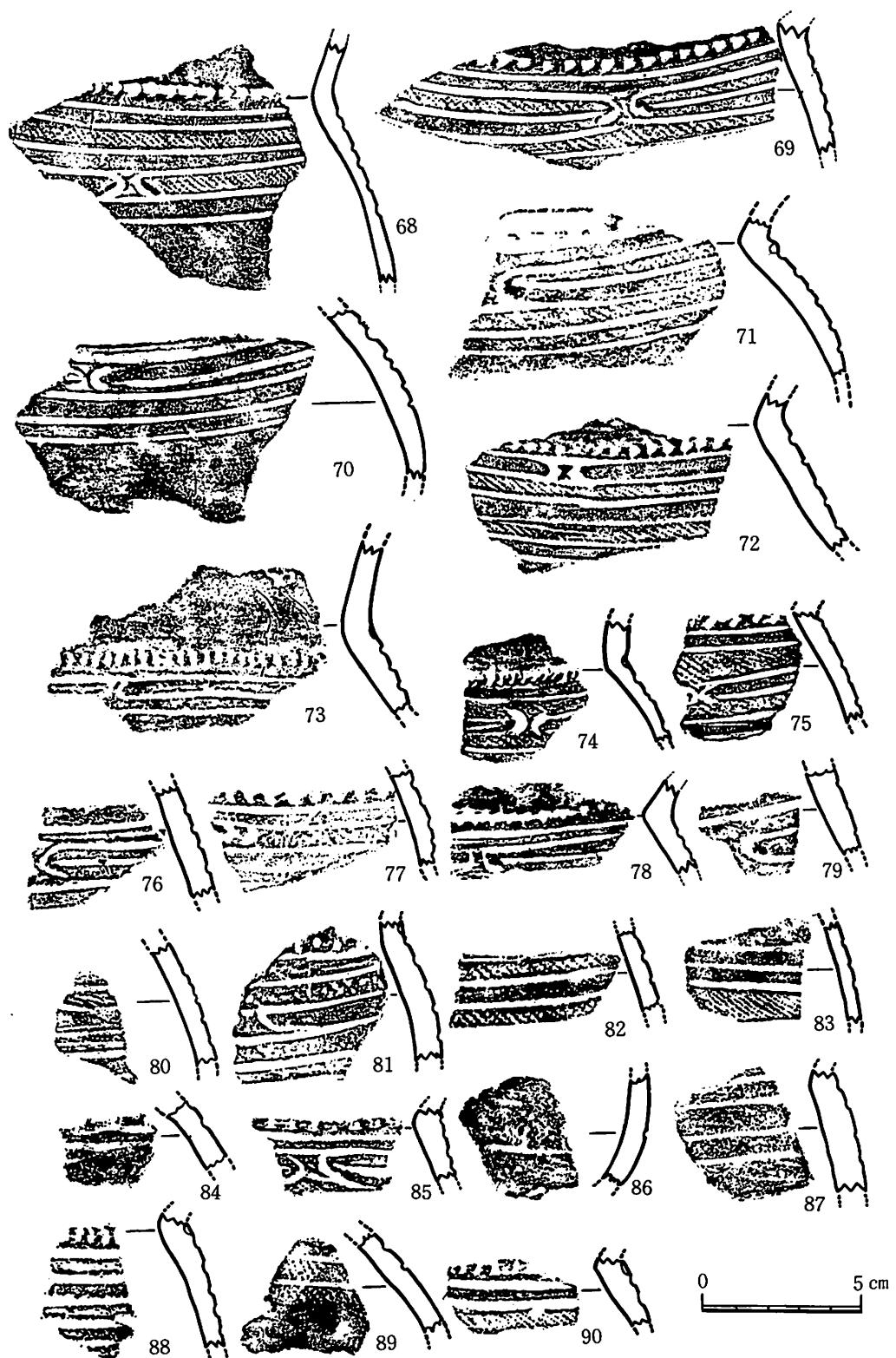
第14図 出土土器実測図



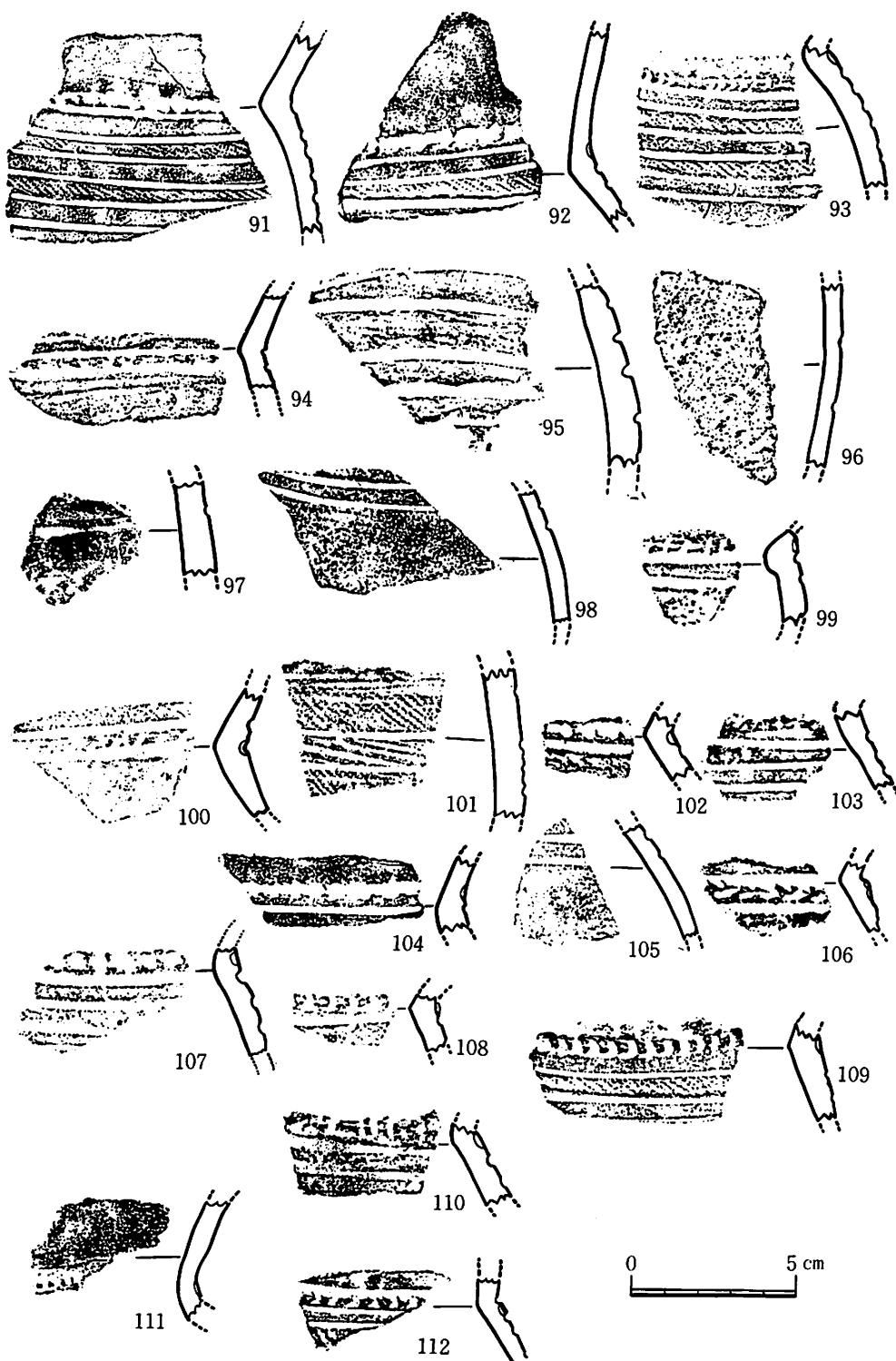
第15図 出土土器実測図



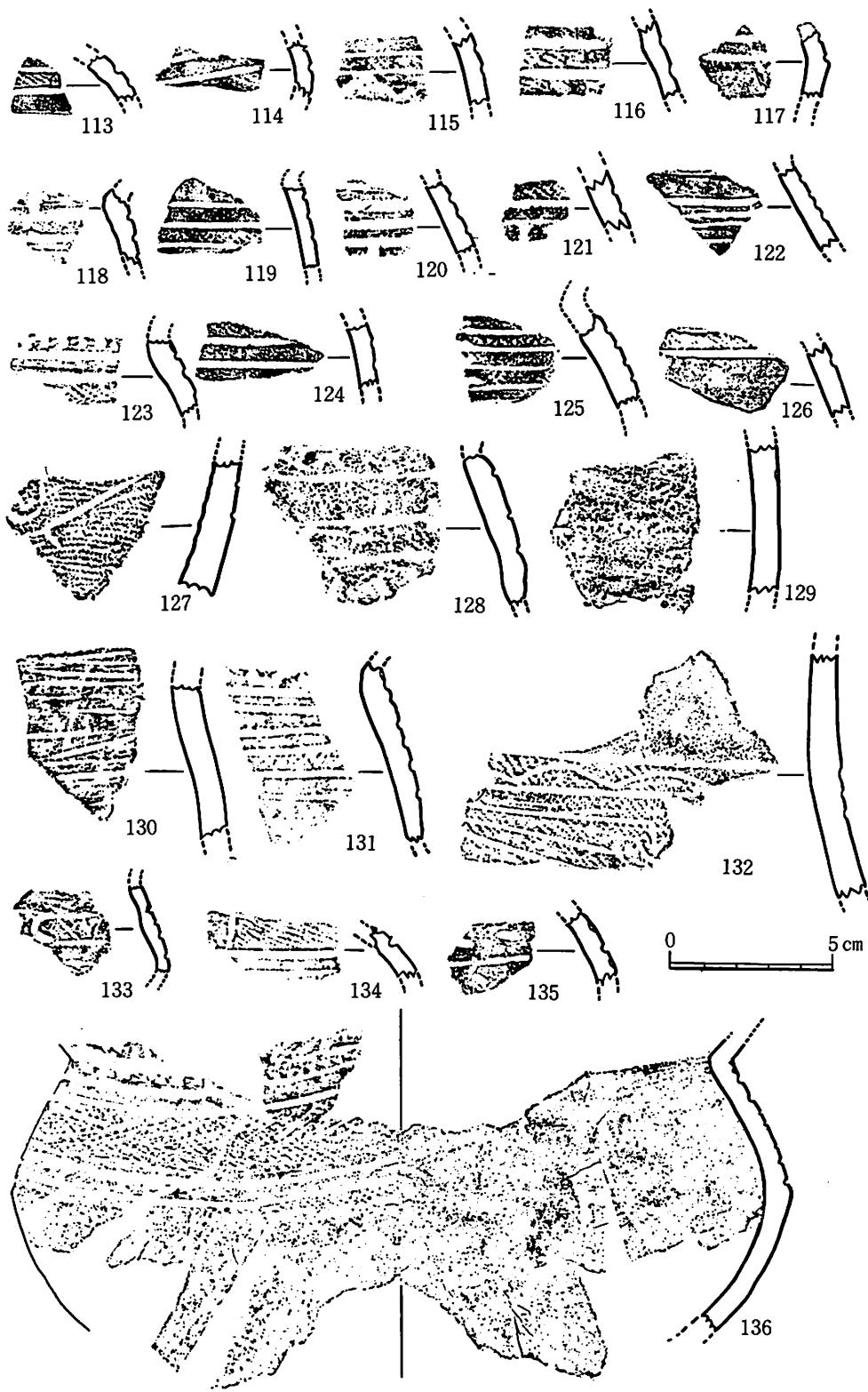
第16図 出土土器実測図



第17図 出土土器実測図



第18図 出土土器実測図



第19図 出土土器実測図

## II - a 類 (第16図42~58)

波状口縁を呈する土器群である。2条の沈線を有し、中央を除く上下間に磨消繩文を施す。波状頂部において、上部沈線は山なりに間隔を広げる。又、一個単位の押点を持つ(42, 51~57)。55・56は、その中にあって全面に磨消繩文を施す。58 (P L12-2)は、口縁部に平行沈線文を描き、その間にやはり一個単位の突起を有している。胎土、焼成とも良好の精製土器である。

## III 類 (第17~19図68~136)

壺型土器胴部の集成である。これらの土器群は、I・II類で紹介した口縁部と同一個体のものである可能性が大きいが、確実性がないので別に取り上げてみた。

68~78 (P L13-1~7) 81, 85は頸部に半截竹管文を有し、肩部において数条の沈線を施す。又、「x」文がみられ、その上下沈線間には2条の磨消繩文が施されている。

70, 76においては、この磨消繩文は見られず、III類の中にあっては特異な存在である。

80, 82~84, 86~126 (P L13-8~10) は、前記の資料と文様等においては殆ど相違は見られないが、「x」文が見られないという点で別にしてみた。

しかし、この中にも「x」文が施されている土器と同一個体であるという可能性は多分にあると思われる。

132 (P L12-6) は、頸部に竹管文は見られず、肩部は全面磨消繩文で覆われ数条の平行沈線を有する。又、頸部に近い2本の沈線間には波状の沈線が見られる。

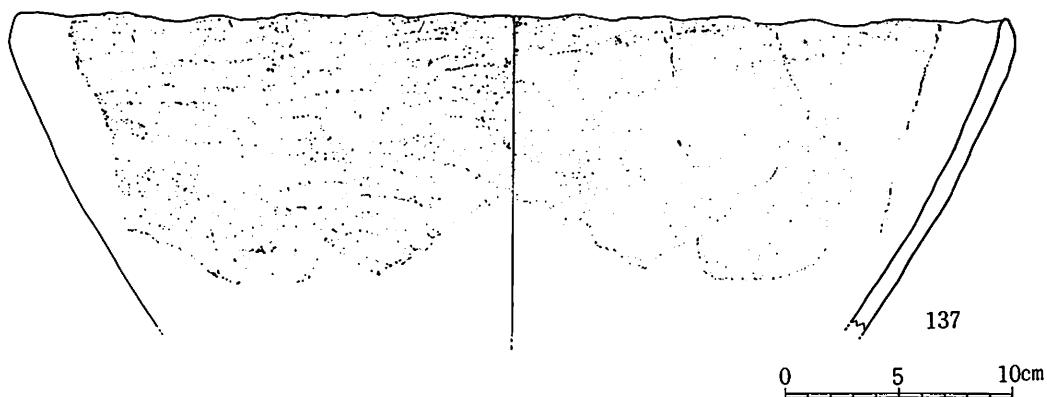
133 (P L12-7) は、数条の沈線を有し「x」文を施す。又、x文の両端には斜沈線が見られる。134 (P L12-9) は、平行する沈線文を有し、その間に垂直に入る沈線で区画を作りその区画内に磨削繩文を施す。

135 (P L12-8) は、施文具による押引文様であろう。

136 (P L14-1) は、壺形土器で頸部に竹管文、肩部に4条の沈線を有し、中央の沈線間には磨消繩文の上に羽状文を施した文様が見られる。

## 無文土器 (第20~23図)

有文土器と大別したこの手の土器は、出土量、器形においてそれほどの差異はみられないようである。



第20図 出土土器実測図

#### I 類 (第20~22図137~162)

137 (P L 14-2) は、図示復元直径43.8cmを測る深鉢形土器で、胎土、焼成共不良の粗製土器である。

138, 141~144は、壺形土器で、口縁部はほぼ直行しながら外斜する。口唇部付近は、薄手で丸味を持つが141は角のある立上がりになっている。145は、復元直径36cmを測り胴部より下部を欠損する粗製の深鉢である。肩部より口縁部にかけて直行しながら外斜し、肩部より下部においてはゆるやかに湾曲する。146は、口縁部に穿孔を見る。全体的に器壁は薄い。160~162は、晩期黒川式に属する研磨土器と思われる。161・162は、口縁部内外面に沈線が見られる。

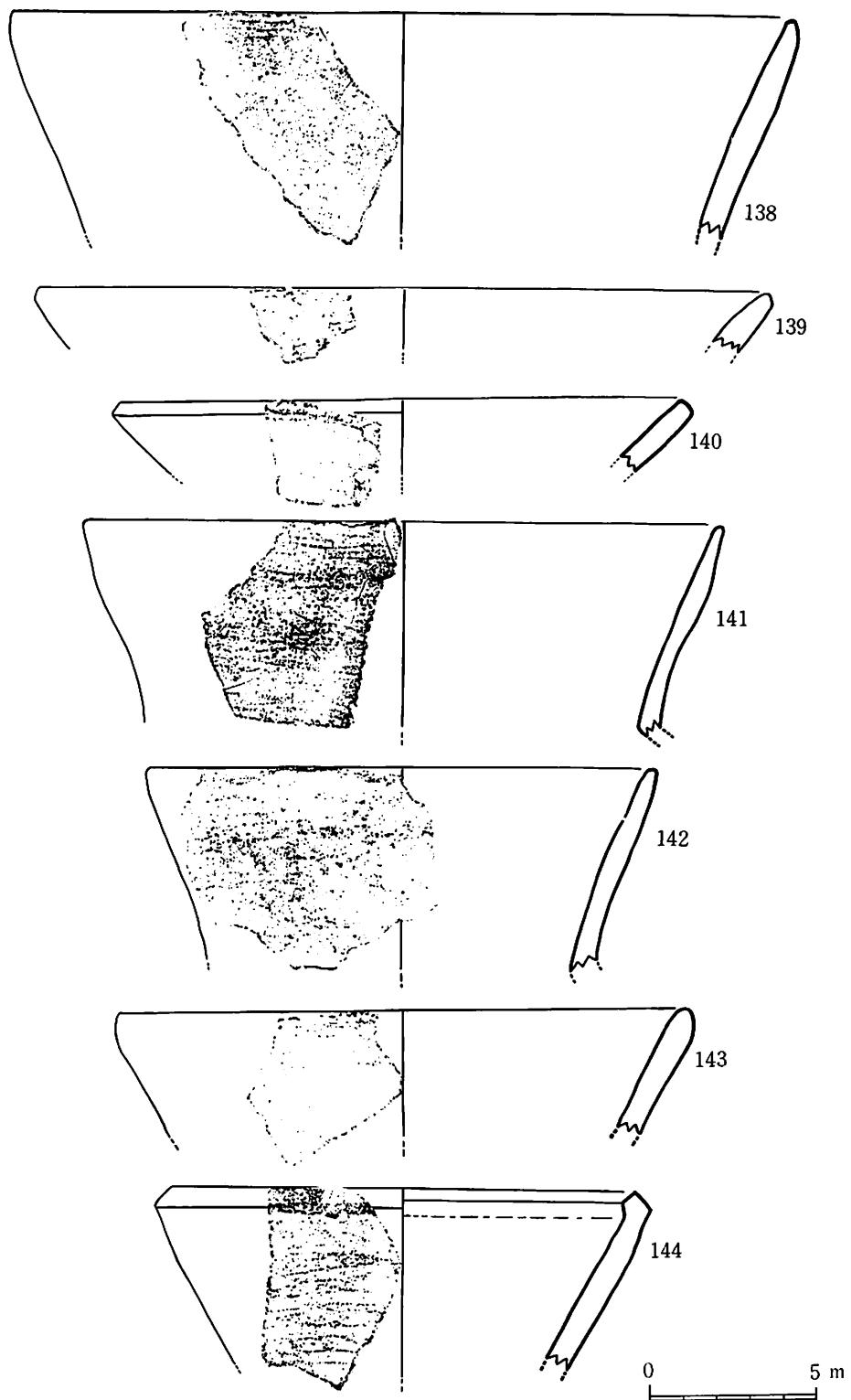
#### II 類 (第22・23図163~183)

無文土器の胴部であり、壺形土器が主をなすようである。178は、上下とも伸びて行く事を見ると突帶であろうか。179は、器壁に穿孔を施す。182は、壺形土器であるが、頸部において大きく屈折する。器壁は薄く、胎土、焼成共に良好である。

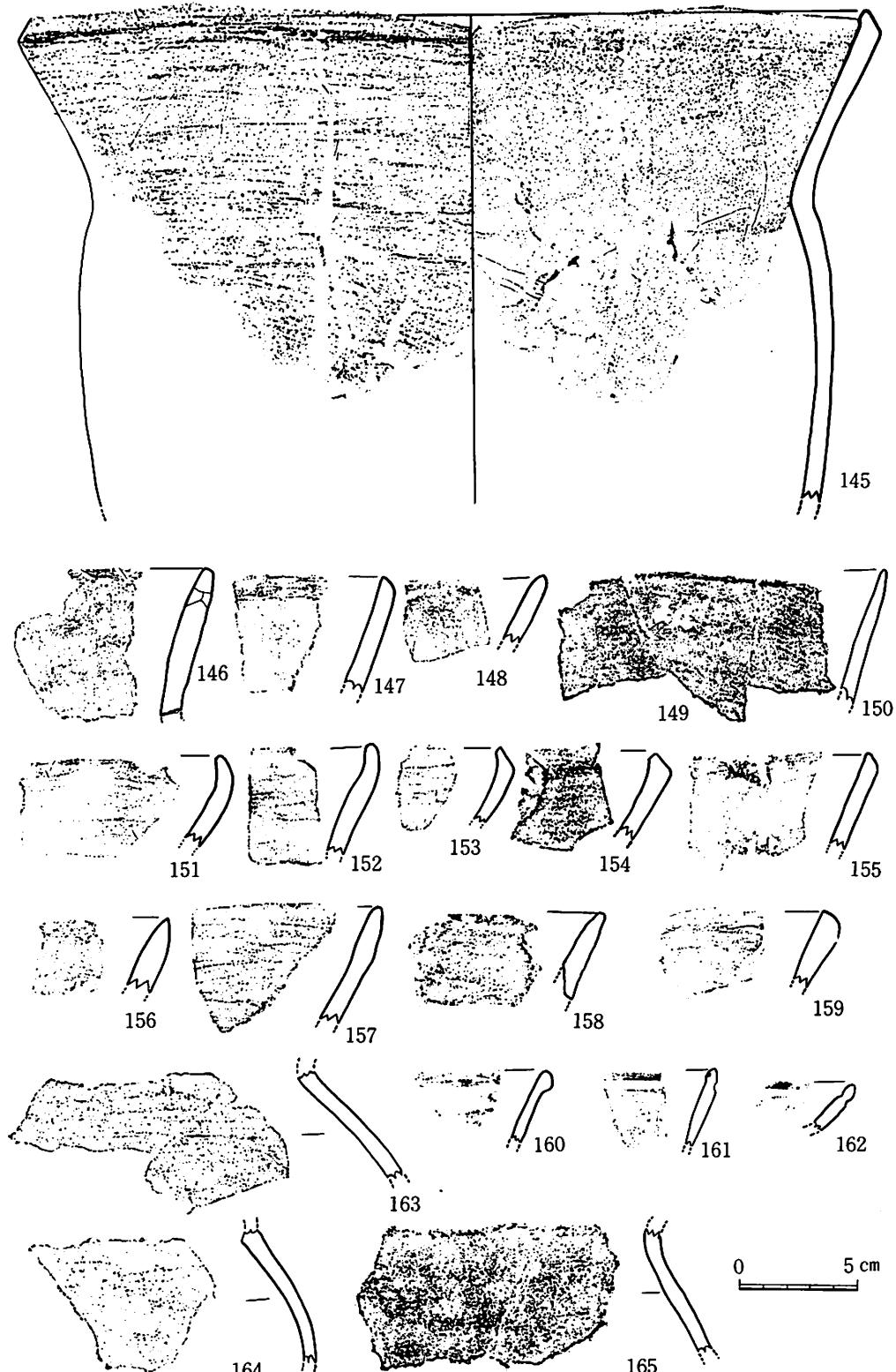
#### 底部 (第24図184~209)

出土地点は別にして、全底部を集めた。殆どのものが上げ底であり、その中に数点の平底がある。

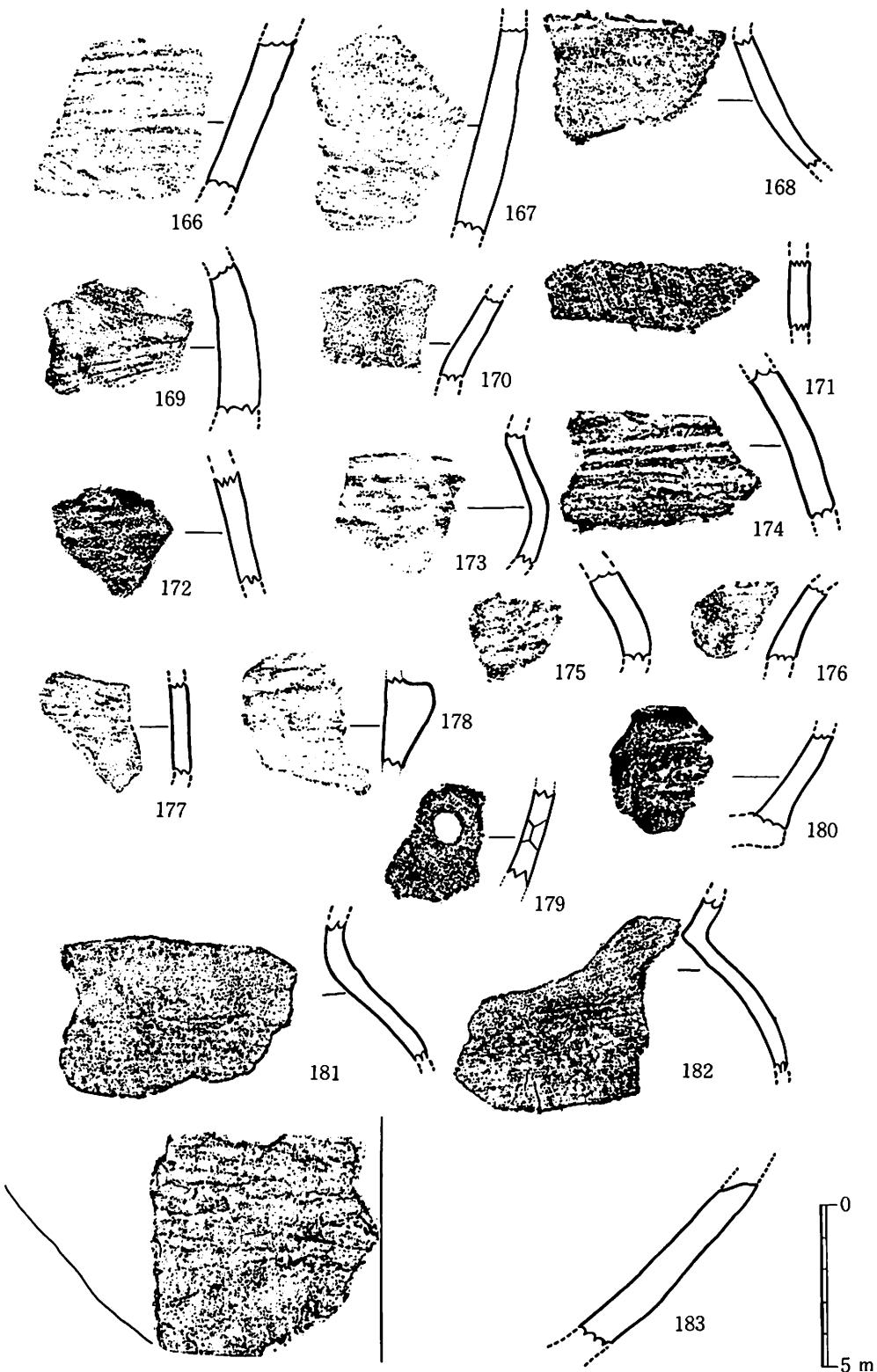
上げ底のものは、ゆるやかに湾曲しながら中央へ向うものと水平に向うものとがあり、底端部の突出はほとんど見られないが、平底では底端部がやや突出しているようである。



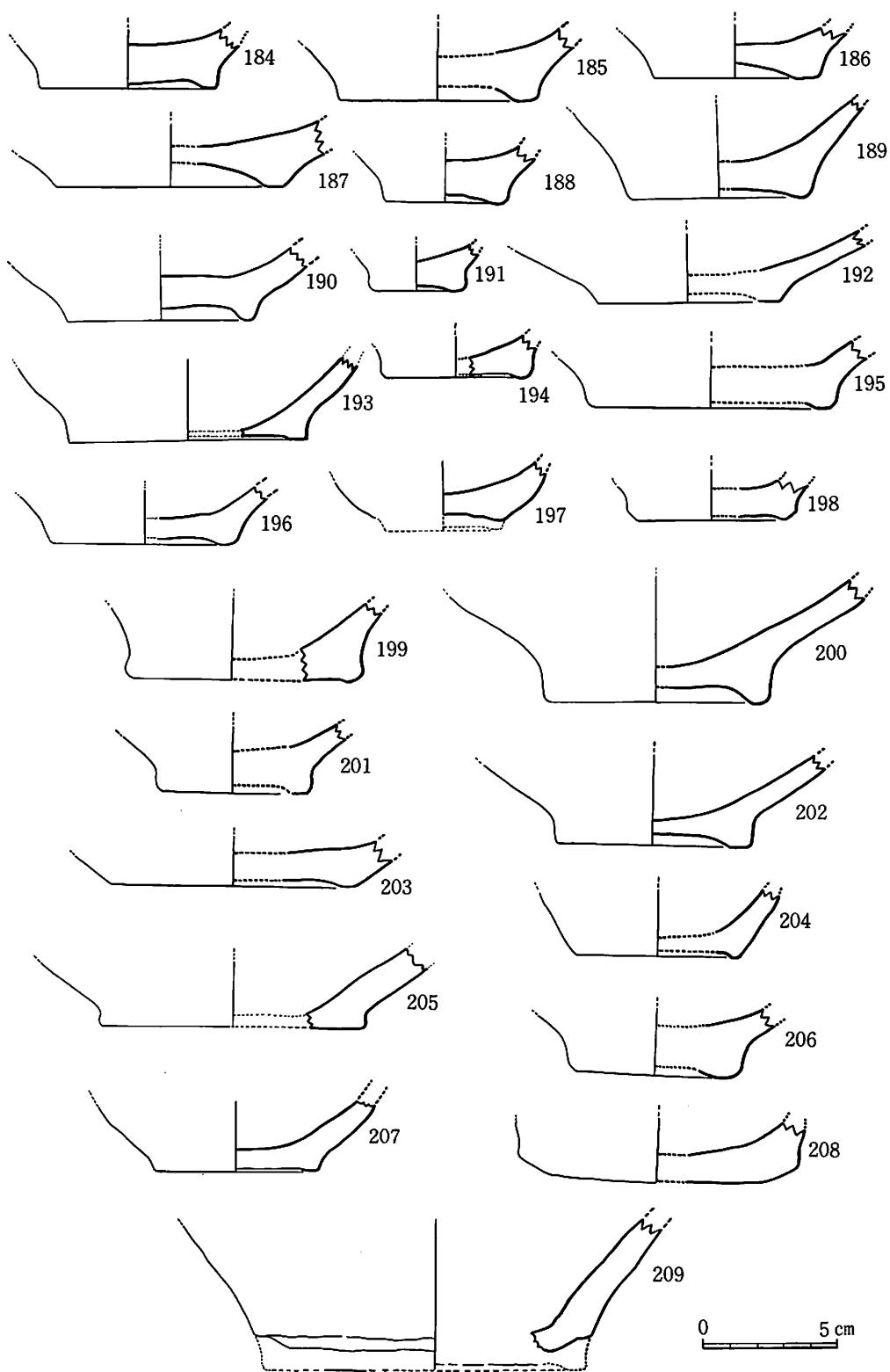
第21図 出土土器実測図



第 22 図 出 土 土 器 実 測 図



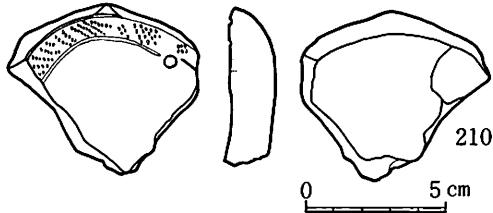
第23図 出土土器実測図



第24図 底部実測図

〈土製品〉(第25図・PL14-3)

本製品は、6.5cm×6cm、  
厚さ 1.5cmで、表面外周部  
には2条の沈線を有し、そ  
の間には磨消繩文を施して



第25図 土製品実測図

いる。中央部は、ヘラで調整され多少湾曲している。内側の沈線上には一個の穴があり、この穴が沈線の基点になっているように思われる。又、外側の沈線は比較的円形を描くが、内側では方形を示すようである。端部は、殆どが原形をとどめないが一部残存しているのでこれ以上伸びる事はない。

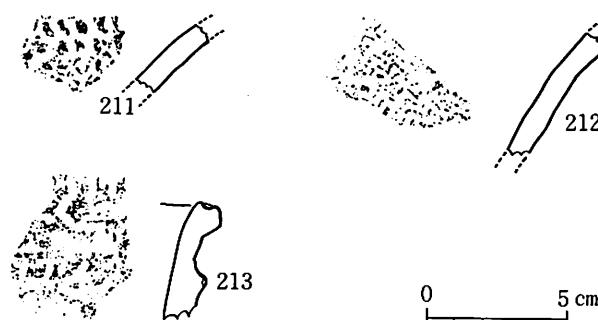
本製品は4分の1程度しか残っていないため断定できないが、周辺からは土偶も発見されている事などを考慮すると、完成品になれば円形もしくは方形の土偶になると考えられる。

この土製品について、類例などご存知の方はご教示願えれば幸いである。

押型文土器 (第26図211・212, PL14-4・5)

今回の調査において押型文土器の出土には第2次調査における2点だけである(第28図211・212)。211は楕円押型文で第1トレンチ第4層(粘質の強い褐色土)下部より出土したもので、楕円長径は約5~6mm程度である。212は山形文で第2グリッド第4層より出土したもので、山形の頂点間は約7~8mmである。両者共に器面の磨耗がひどい。又、小片のため施文具の大きさ等についての解明は不可能である。

213(PL14-6)は第1グリッド第5層より出土した粗製の深鉢形土器である。口縁部と突帯に刻目を施す。又、口唇部と突帯間に垂直に伸びる突帯を有している。



第26図 第2次調査出土土器実測図

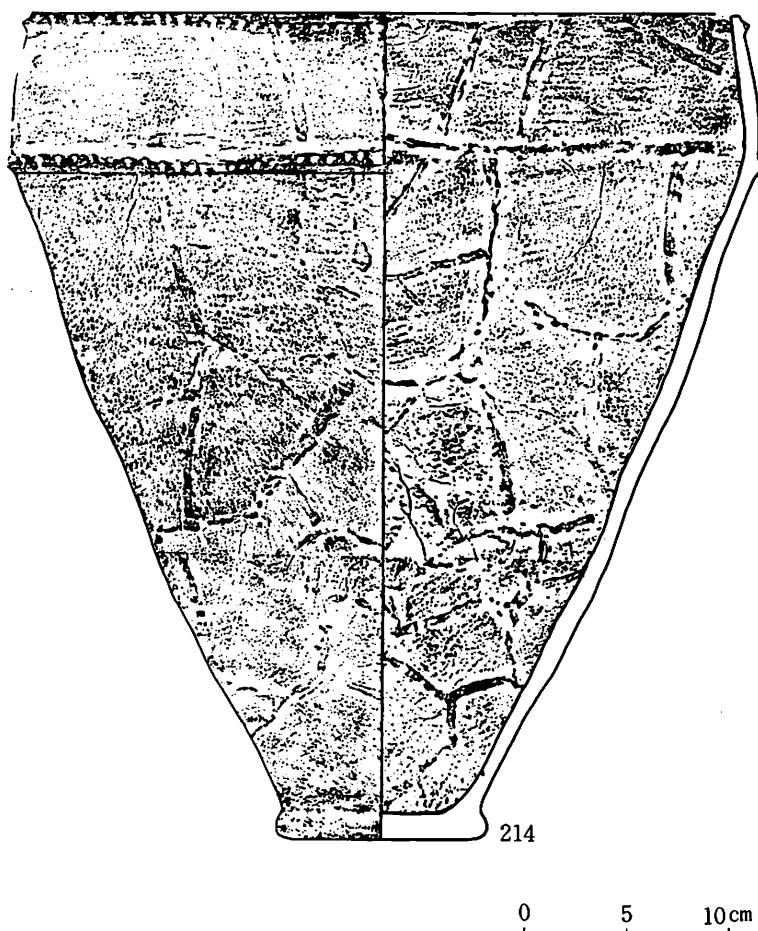
〈博物館敷地内出土のカメ棺〉（第27図）

昭和53年、山鹿文化財を守る会の手によって博物館東側の一角に縄文時代の復元住居を建てるための地盤整備を行った。その際出土したのが第29図の土器で、城・下原遺跡出土の山ノ寺式土器と同一器形を呈しているので、関連資料として紹介することにした。

土器が出土した地形はもともと山林で、城・下原遺跡より南へ約2km、東鍋田遺跡より北へ約0.5kmの位置にある。（第1図8）

この土器の復元直径は34.6cm、高さ40.2cm、器厚0.8～1cmを測る。

器形は口縁部から肩部にかけてわずかに屈曲し、底部にかけてはいわゆる輪積みによると見られる凹凸がみられる。底部は、円盤貼り付である。口唇部直下と肩部には突帯をめぐらし、さらには指による指突文を施す。胎土、焼成とも不良の粗製土器である。



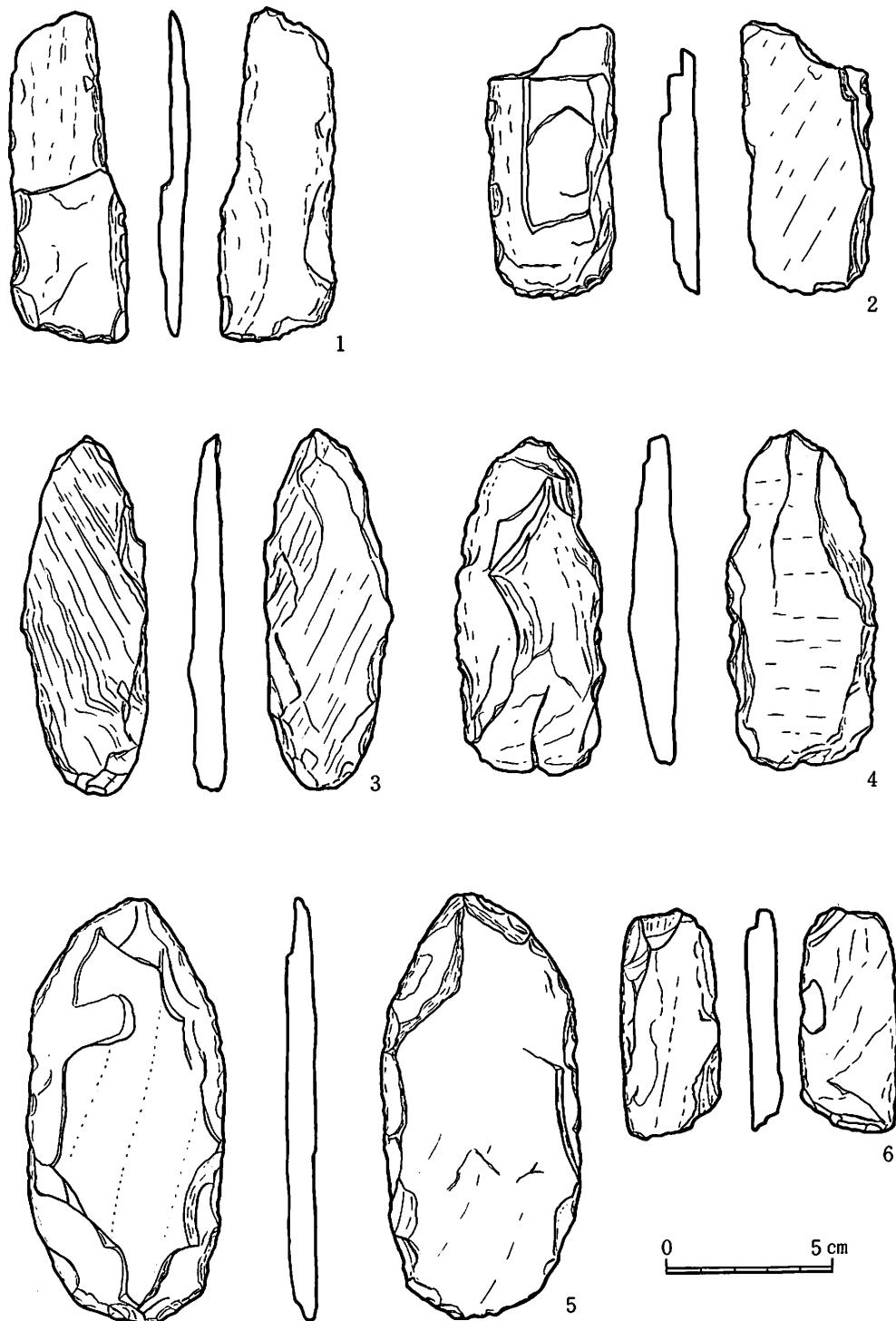
第27図　博物館敷地内出土土器実測図

## (2) 石器 (第28~31図)

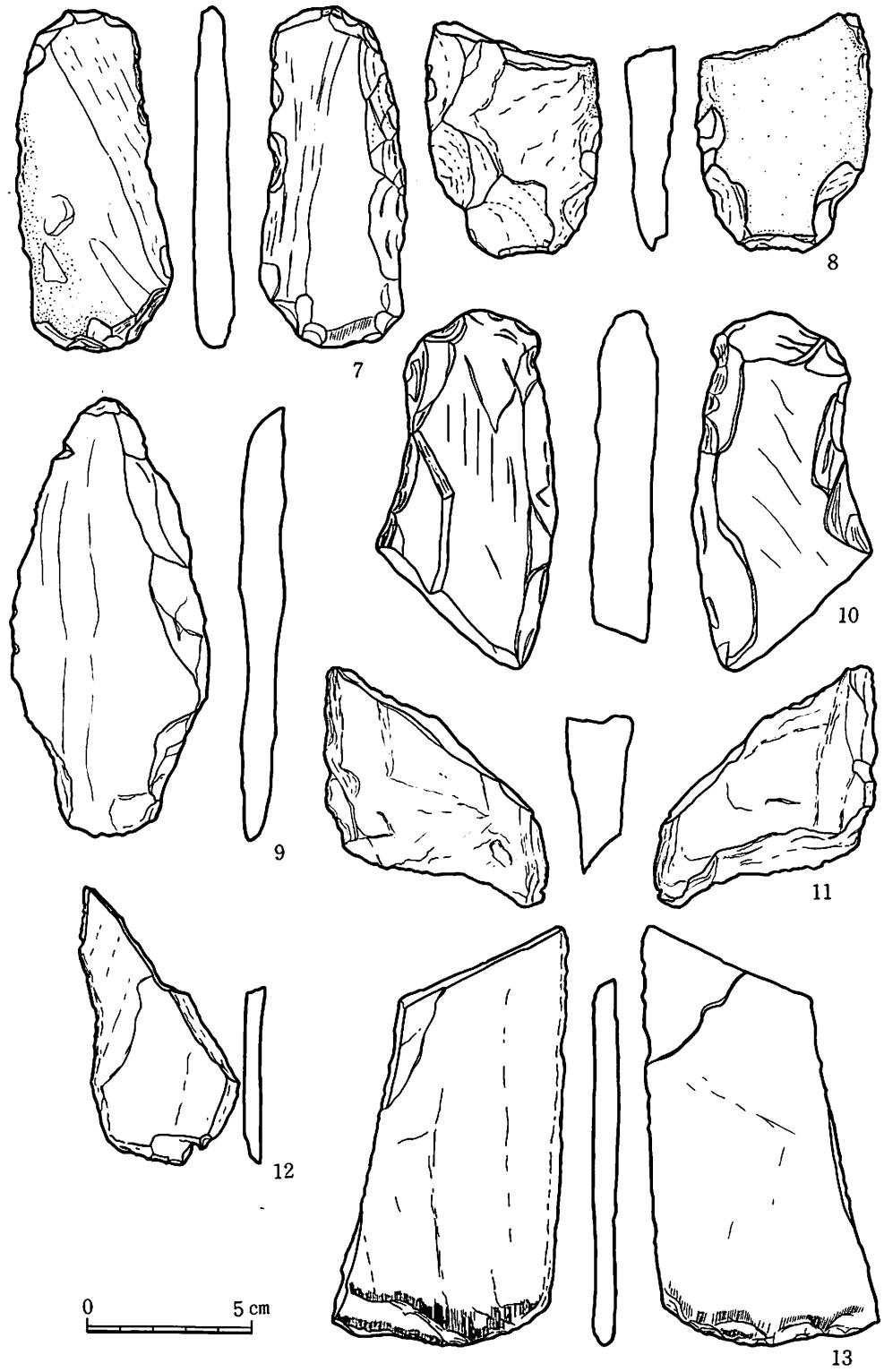
今回の調査では石器の出土量はきわめて少なく、その種類も限られていた。特に注意すべきものとして、磨製石器の出土が1点も見られず、その殆どが打製石器であった。さらに緑泥片岩を材料とした石器が最も多く、その中でも石斧の占める比率は大きいようである。また、石鎌は、わずかに1点発見されているだけであった。それも基部を欠損した状態の石鎌である。このように、石鎌の出土数が少なく、打製石斧の数が多いというような石器の出土傾向を見ると、この遺跡の性格がうかがえるようである。なお資料については、時代的な開きがあまりなく、一括して紹介するものとした。

### 扁平打製石斧 (第28・29図1~13・PL-15)

石斧の殆どが緑泥片岩で作られており、わずかに8が花崗岩で作られている。1は、B-7区表土層より出土したもので、短冊形を呈している。上部を剥落しているが、剥落した部分に二次加工が見られるところから、恐らく、この状態で製品として使用したものと考えられる。2は、上部を欠損しており、1と同じくB-7区より出土している。短冊形の小形の石斧で、a面から主として加工を施しており、b面は主要剝離面を残している。3は、E-4区より出土した石斧で柳葉形を呈している。下部における摩滅が著しい。4・B-7区より出土した短冊形の小形石斧で、主要剝離面を残している。5は、C-17区より出土したもので、出土した石斧の中では比較的丸味を呈しており大形に分類できるものと思われる。6の石斧は、今回出土した石斧の中では最も小さく、短冊形を呈している。比較的自然面を残した状態で、周囲を加工されている。ノミの可能性が強い。7は、A-4区より出土しており、下部において著しい摩耗が見られる。8は、花崗岩製でE-4区より出土している。小さな礫に加工を施したものでa面から主に加工しており、b面においては下部で加工を見ることができ、自然面を多く残している。なお上部は欠損している。9、この石斧はIIIトレンチより出土したもので、尖頭状になっており、基部を作っている。一応石斧としてここでは取り扱っている。自然面を多く残し、加工された部分はきわめて少ない。10・C-17区より出土したこの石斧は、下部を欠損しているが、わずかに湾曲していることがうかがわれる。また、これまでの石斧に比べれば、厚味を増している。その意味では8~11とは区別できるものと



第 28 図 扁平打製石斧実測図



第29図 扁平打製石斧実測図

考える。11、B-7区より出土しており上部と下部とを欠損し、胴部のみの状態である。表面は摩滅が進んでおり特に中央部に著しい。10と同様比較的厚手といえる。12、C-17区出土の石斧で上部を欠損し、裏面を剥離している。刃部においては摩滅が著しく残っている。13は、D-4区より出土したもので、扁平な石材の下部に刃を加工しただけのもので周囲は折れたままの状態である。刃部の摩滅は著しい。

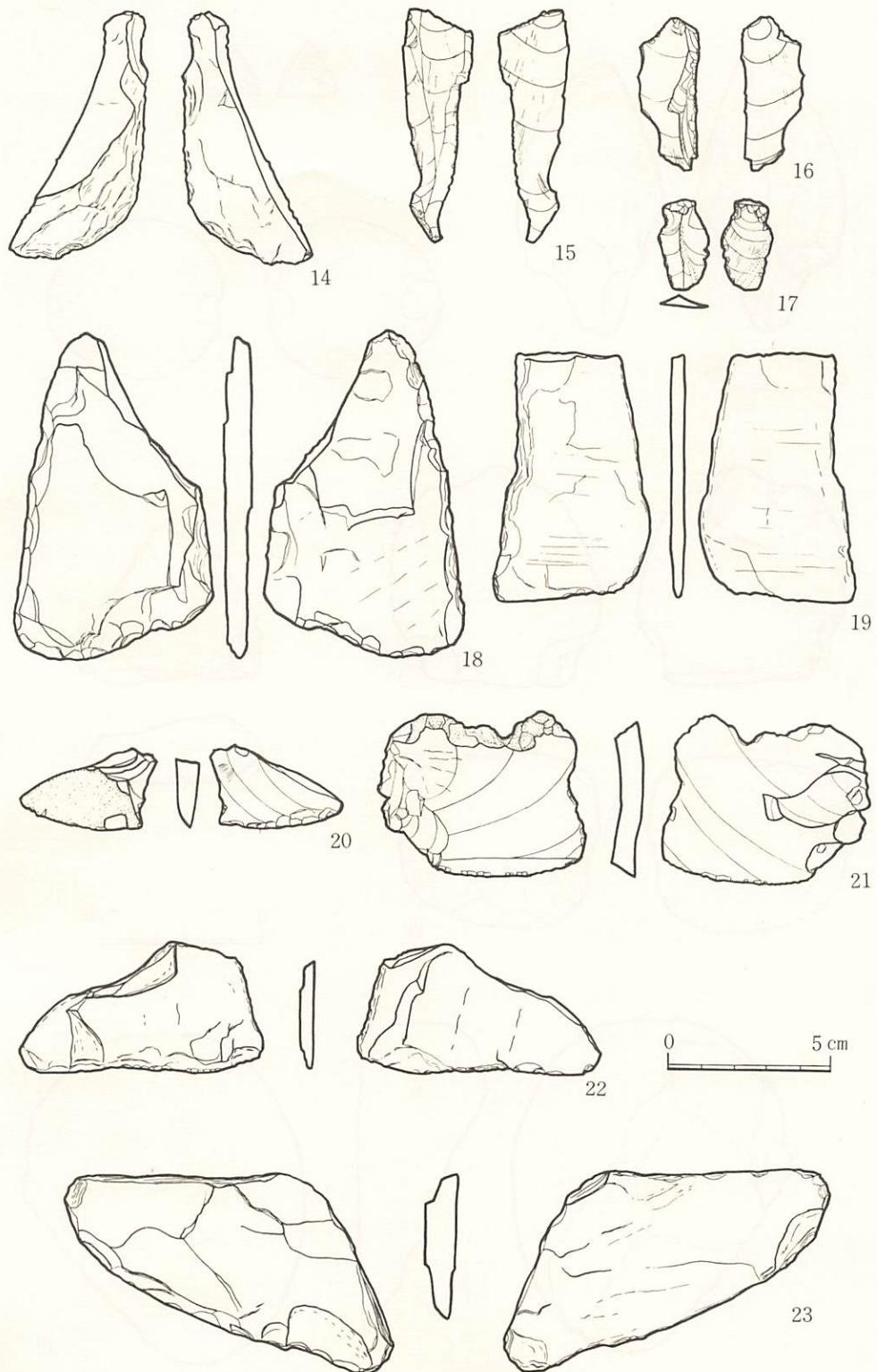
#### 削器（第30図14~23・PL-16）

この中には縦長剥片を用いたものと（14~19）、横広剥片を用いたもの（20~23）に分けられる。石材はサヌカイト・黒曜石・緑泥片岩を主に用いている。なお使用痕のある不定形の剥片石器や、収穫用具と思われる資料も含んで記載した。

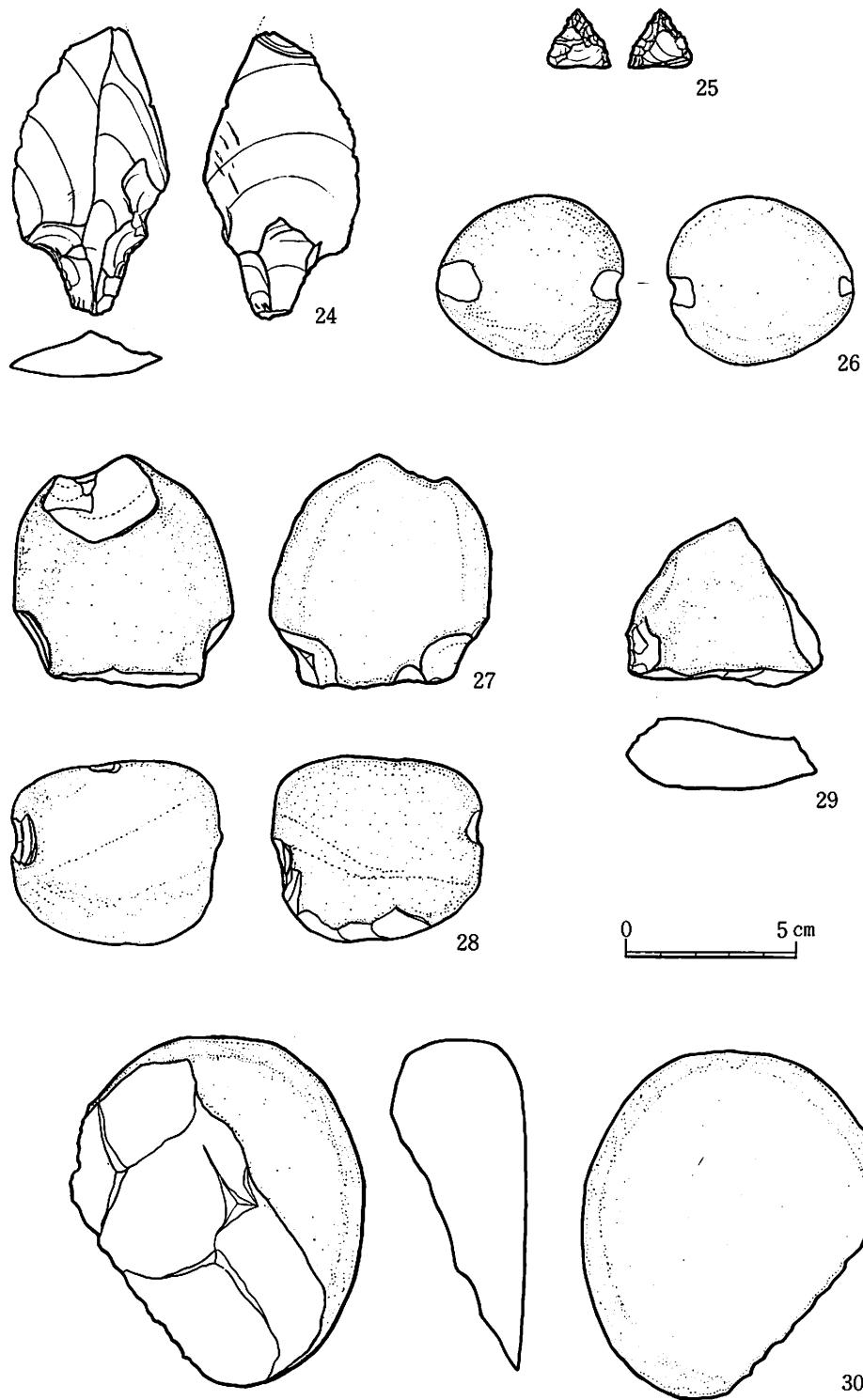
14、C-17区より出土したもので、緑泥片岩の縦長剥片を用いている。つまみ部分と背部は、半折した状態で利用しており、刃部は階段状剥離によって形成されている。15も同じくC-17区より出土しており、黒曜石の不定形の縦長剥片を用いている。剥片は一度の剥離で作り出しており、2条の稜を有している。バルブはカットし、その面に刃潰しを行っている。両辺の刃部には使用痕が見られる。16、これもC-17区より出土している。黒曜石の縦長剥片を用いており、バルブを残している。石材自体は透明に近く、わずかに黒く曇っているようだ。一側辺に刃部を形成し使用痕を認めることができる。

17、第1グリッド内V層出土のこの資料は、黒曜石の縦長剥片を用いている。バルブの両側にノッチを加え、つまみを形成しており両側縁を刃部としている。18、緑泥片岩のこの石器は、上部を欠いている石斧のようだが、上部まで二次加工が施されており、削器として取り扱った。加工は、階段状剥離によってなされていて、側縁と下部に刃部を形成している。19もC-17区から出土しており、側縁の片側にのみ階段状剥離による刃部を形成している。他の辺では一次剥離のままである。なお、上部は欠損している。20、サヌカイト製のこの石器は蝶番剥離による剥片を使用しており、片側からの剥離で刃部を形成し、自然面を有している面からは加工を施していない。なお上部は折られている。

21、C-17区出土、サヌカイトの不定形剥片を利用しておらず、上部には自然面を残している。刃部は下部のみで、使用痕を認めることができる。22、C-17区出土で、緑泥片岩を用いている。23と同様で収穫具と考えられる。下部のみに刃部を形成している。23、C-17区出土で、緑泥片岩製の収穫具と考えられる。石包丁形の石器で、上縁と側縁は自然面で、下縁のみに刃部を形成している。刃は、片側からのみの剥離である。



第30図 削器実測図



第 31 図 尖頭器・石鎌・その他礫器実測図

### 尖頭器（第31図24・PL-16）

サヌカイト製のこの石器は、縦長剝片を利用したもので1条の稜を有している。バルブの両側を加工し基部を形成しただけのシンプルな形の尖頭器である。先端は欠損しているが風化の度合いから使用時に折れたものと考えられる。風化はかなり進んでいる。この資料は、第1トレンチIV層（褐色土層）より出土したもので、押型文土器と同時期と考えられる。

### 石鏸（第31図25・PL-16）

予備調査も含めて唯一の石鏸である。黒曜石製のこの資料はE-5区より出土していて、縦長剝片を用いており、バルブを加工して先端としている。下部を欠いているため形は不明であるが、主要剝離面を残しているところから、技術的にはあまりすぐれているとはいえない。

### 石錘（第31図26～28・PL-16）

石錘は3点出土しており、礫の両端を抉って利用している。27においては凝灰岩製（軽石）で、下部を折った状態で、三方に抉りを入れている。重量は、26が60g、27は90gさらに28においては85gを測る。26はA-4区出土で、27・28においてはc-17区より出土している。

### 石皿（第31図29・PL-16）

半欠品で全体の大きさは不明だが、砂岩質の比較的小さな礫を用いたものと思われる。中心に向ってわずかに凹んでいて磨かれている。ただ石皿とすれば小さく、厚みがないところからまだ断定しかねるところである。

### 磨石（第31図30・PL-16）

A-4区より出土したこの資料は、半欠品であるが長円形になるものと思われる。両面はかなり磨かれており、周縁も叩き調整されている。そのため断面長方形に近い形になっている。

## 6. まとめ

### 遺跡について

猛暑の中での夏の調査と、白銀の世界での冬の調査、気候条件の最もきびしい時期に約2ヶ月にわたって発掘調査を実施してきた。

その結果城・下原遺跡は、予備調査区、及びC-17地区を中心として広がりを持った遺跡であったことが判明した。しかしながら、すでに、機械力によって畑地の整地が行われ、その際、縄文時代後期から晩期にかけての包含層を破壊していた。以前、この地域の畑の多くは、桑畑として利用されていた。今日では台地上にボーリングをして水を出すことが盛んに行われているが、戦前から、戦後、特に昭和45・46年頃までは殆どの畑が桑畑であった。生糸の生産が下火になった昭和45年頃、桑畑から、スイカやメロンの栽培へと転換していった畑が多かったのである。その際、桑の根を抜くためにブルドーザーを数軒の家で共同で動かしたり、抜根機を使ったりして畑地の整地を行ったのであった。この整地は全ての畑で行われており、以前、桑畑でなかった畑のみが、かろうじて包含層を残している現状であった。

### 遺跡の性格について

遺跡発見の動機ともなった資料（第12・13図）以外は、出土遺物の殆どが縄文時代後期（西平式土器）に属するものであった。さらに、石器の全てが打製石器で、特に縄泥片岩製の扁平打製石斧が最も多く出土した。縄文後期から晩期にかけて出現するといわれるこの扁平打製石斧は、台地上の遺跡から出土することが多い。さらにこの石器の中には収穫具（石包丁型石器）も見ることができた。逆に石鎌については、わずかに1本検出されたに過ぎなかった。<sup>①</sup>

城・下原遺跡の南1kmに在る東鍋田遺跡（第1図-8）も同様の遺跡である。この遺跡からはプラントオパール分析によってイネ科の存在が明らかにされている。城・下原遺跡においても石器の組成等から考え、当時の人々が、狩猟や漁労によってのみ食物を確保したのではなく、恐らく、耕作による植物の栽培や、その貯蔵によって食物の安定確保を行っていたものと思われる。

## 山ノ寺式土器について

先に述べたように晩期の資料はきわめて少なかった。当初、山ノ寺式土器が出土したために、遺跡の年代としても晩期であろうと考えて調査を実施したのであった。調査の結果、その時期の遺構は何1つ検出されず、土器片すら黒色研磨土器(第22図160～162)を数点出土しただけであった。このことからも考えて、ここに出土した山ノ寺式土器は、カメ棺の可能性が強くなってきた。出土状況も、口を重ねた状態であったということから、恐らく合わせ口のカメ棺であったろうと考えられる。

また、この周辺の遺跡からも、縄文時代のカメ棺が出土している。前項で述べた博物館内出土(第1図5・第27図)もその1例で、この他には、山鹿市鍋田・西原遺跡(第1図-10)<sup>①</sup>からも出土している。この時期のカメ棺は単独で出土する傾向を示すため、恐らく城・下原遺跡出土のカメ棺も、それに類するものと理解される。

① 高木正文氏教示

② 松本健郎「東鍋田遺跡」『菊池川流域文化財調査報告書』1978

③ 畑中健一(北九州大学)・藤原宏志(宮崎大学)氏の分析による。

④ 隈 昭志「熊本県の縄文時代カメ棺」『考古学論叢』2 1974

# あとがき

## —報告書に添えて—

本館は昭和53年4月1日に開館し、今年はその第2年度に当る。本書は本館の報告書第一冊である。

この機会に本館経営にあたっての私の気持を書いておきたい。

従来、博物館といえば貴重な文化財、珍しいものをたくさん展示してあって、それを見学に行くところとだけ思われていたようである。和の認識の足らなさかも知れないが一般にそうしたイメージを持たれていたことは否めない。

しかし、今は違う。博物館は単に収集した物を見せるだけのものであってはならない。その地域における文化センターとしての役割を持つべきものであるとの見解が支配的になっているように思う。畑を耕していたら、こんな物が出ました。土蔵の二階にこんな書き物が残っていました。見て下さいとみんなが駆けつけてくれる所であって欲しい。行きましょう、案内して下さい。とこちらからも気軽に調査にとんで行く。そしてそれが博物館に収められるようになりたい。博物館法にいう「博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行う」ことに関連したことである。

次に思うことは、博物館・資料館だからと言って、とんでもない遠いところから珍しいもの、貴重な物を並べても、あまり意味がないのではないか。そんなものがあってもよいが、それよりもっと大事なことは、とくに地方の博物館においては、そこに行けばその地域の文化的性格が一目で把握できる。また、すべての資料が揃っているということではないだろうか。

こう考えて本館では、もっぱら菊池川流域を中心に、考古・歴史・民俗資料の発掘・調査・収集に努めているところで、たまたま、本館近くの城・下原から縄文晩期の土器が出土したのを機会に国庫・県費の補助を受けて、調査を実施したわけである。

調査に当っては地主の方々を始め、世話人の方や区長さんの深いご協力を得た。篤く御礼を申し上げる次第である。

館長 原 口 長 之

# 図 版





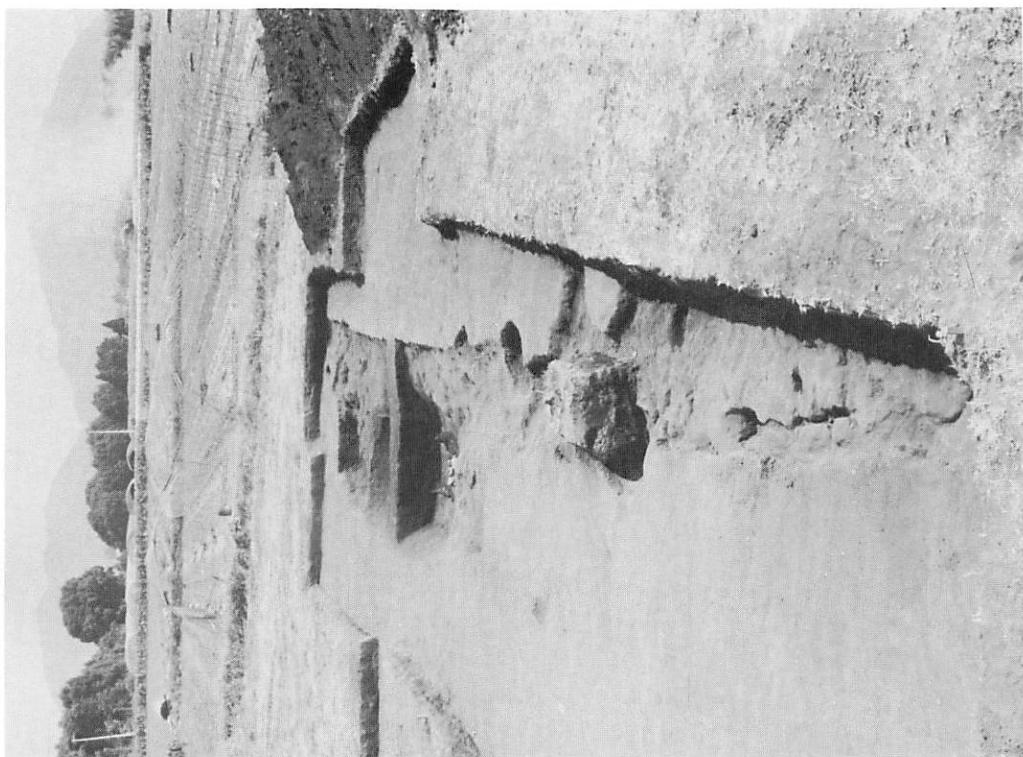


① 遺跡全景



② E—5 区 溝状遺構発掘前

① E—5区 溝状遺構発掘後



② E—5区 土塁





① 土塙内層序および集石



② 集石拡大



① C-17区 土器出土状態



② C-17区 土器出土状態(拡大)



① C-17区 石器出土状態（打製石器）



② C-17区 石器出土状態



① B-11~13区 西側土層



② B-11~13区 土層拡大



① 第 I トレンチ全景



② 第 I トレンチ土層



① 発掘風景



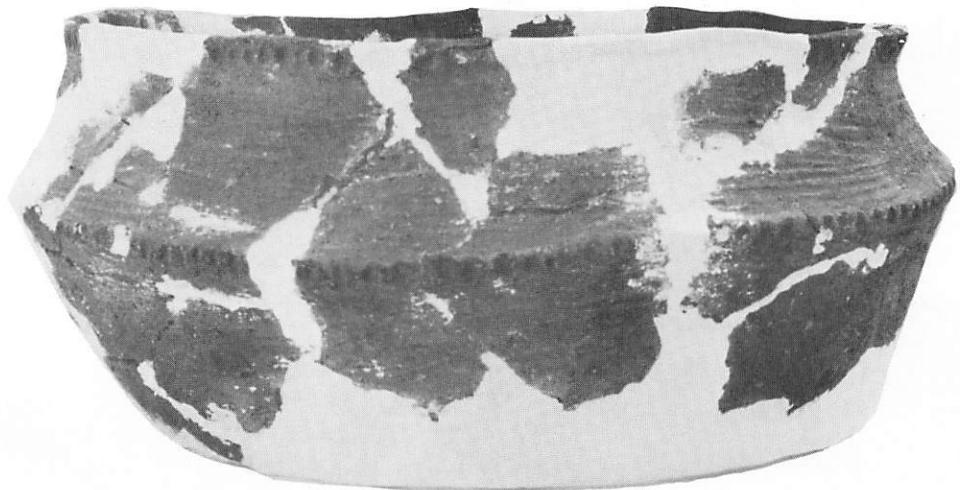
② 発掘作業員のみなさん

① 耕作時出土土器

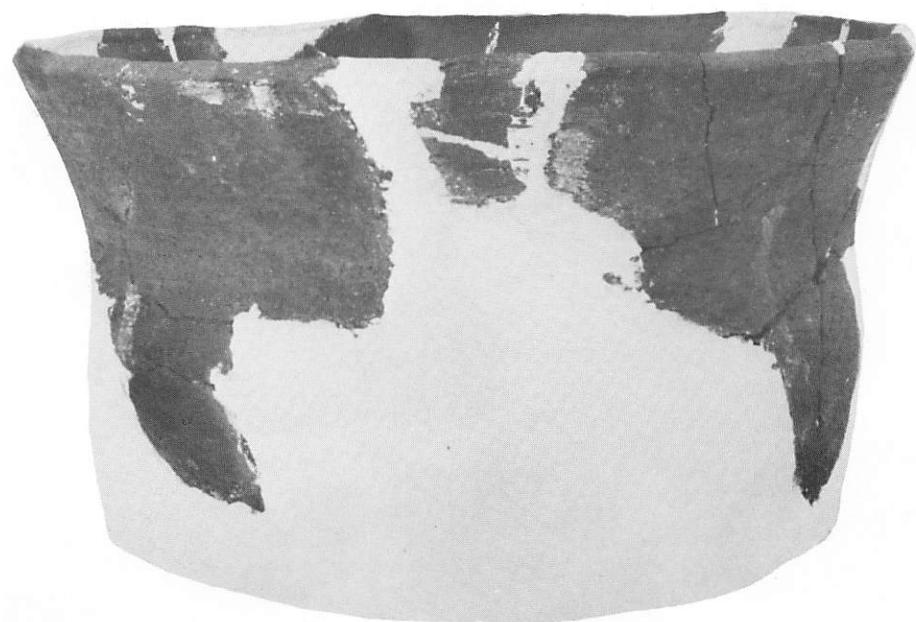


② 博物館敷地内出土土器

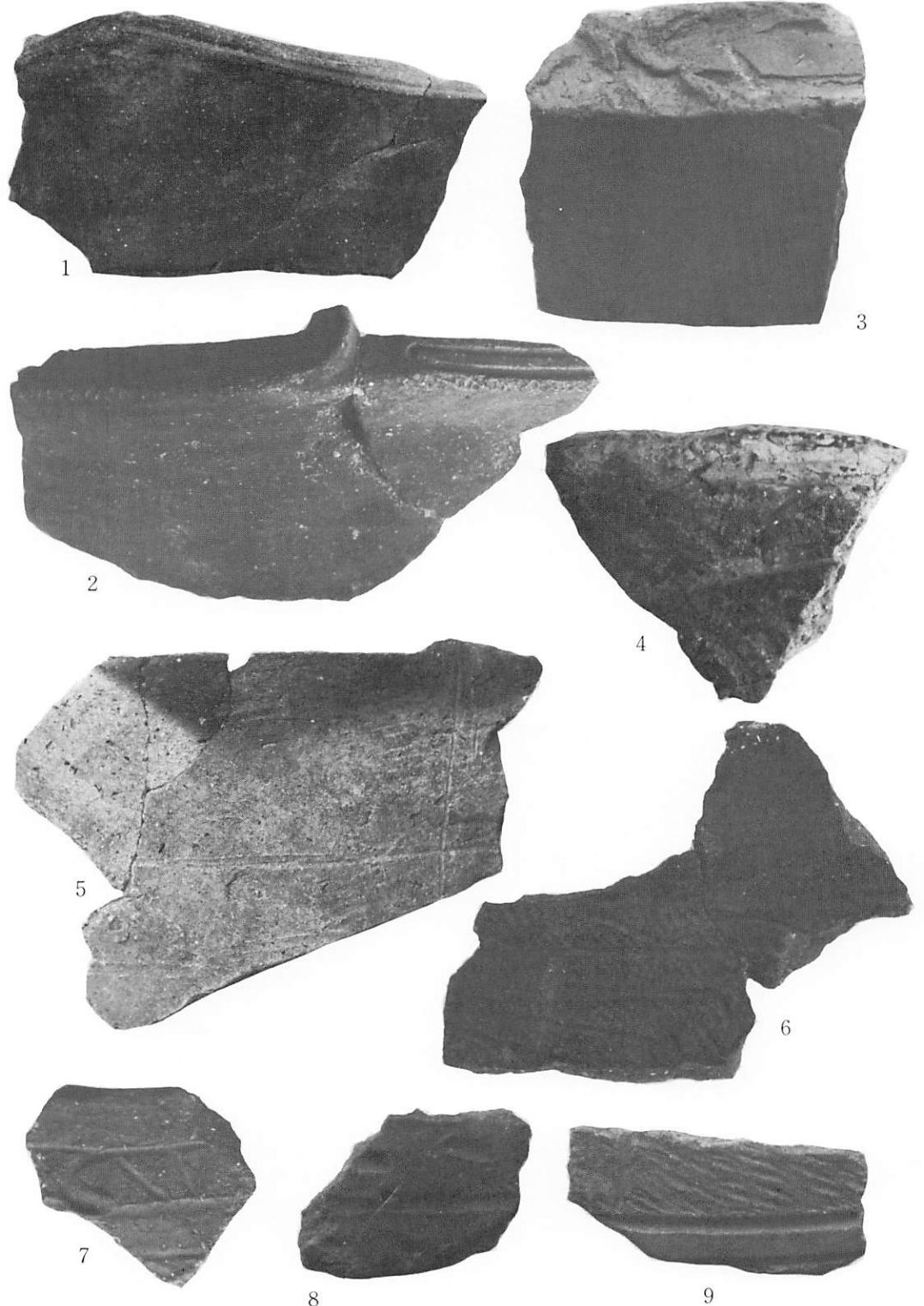




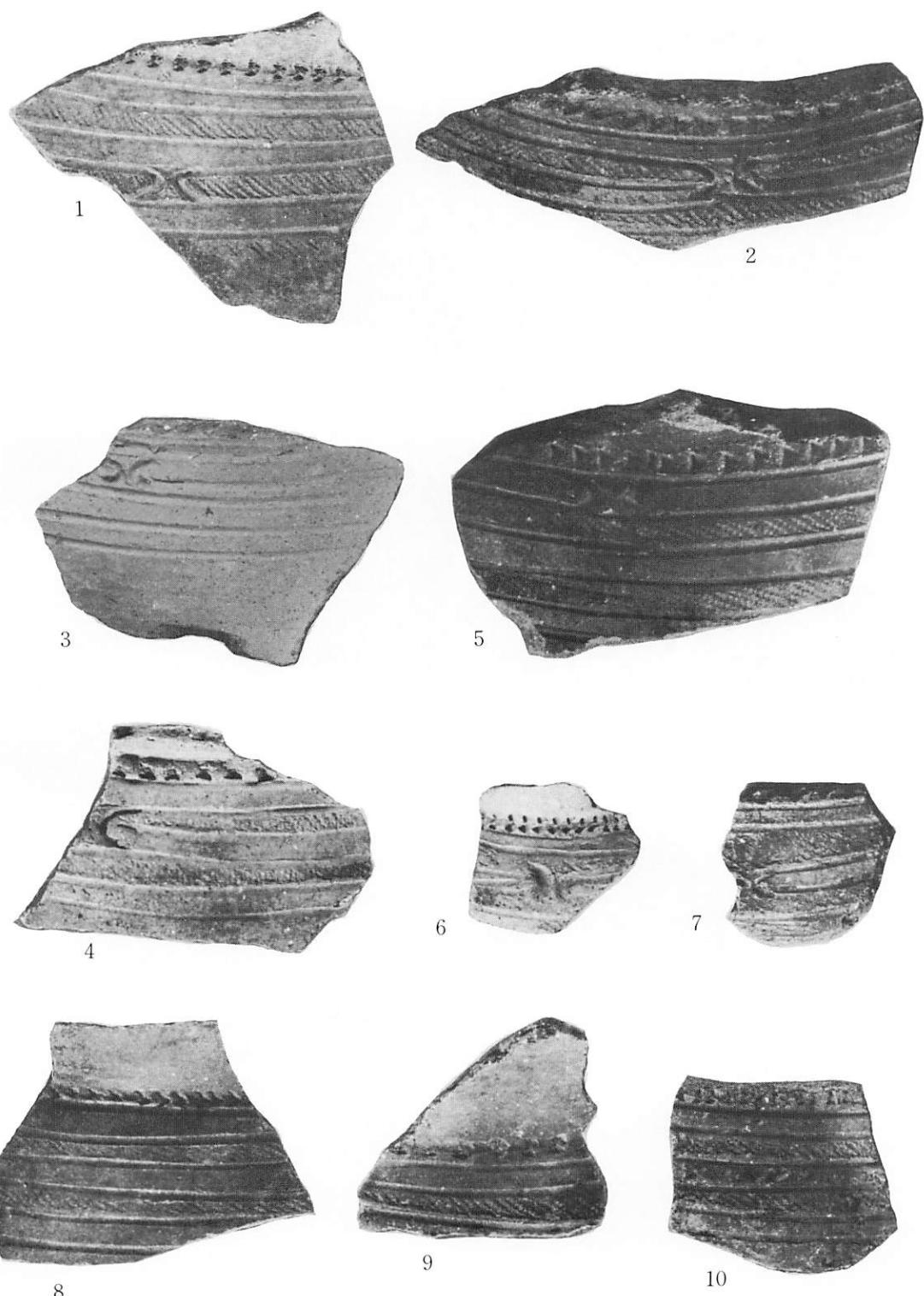
① 耕作時出土土器



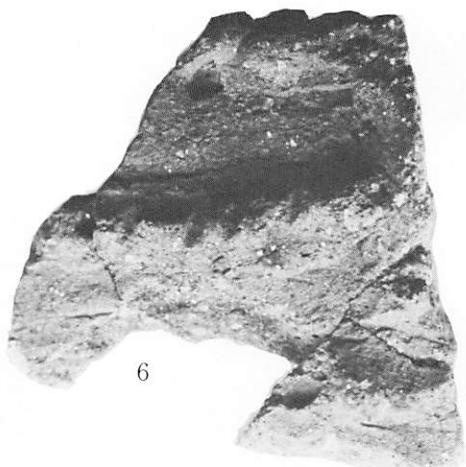
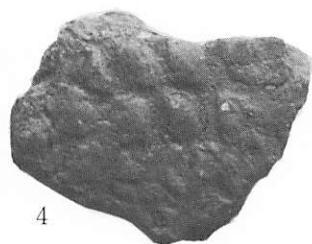
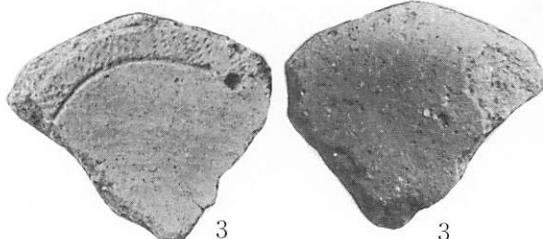
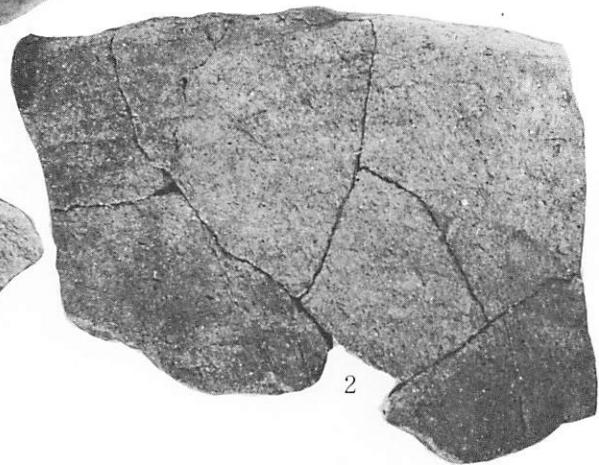
② C-17区 出土土器



波状口縁を有する土器ほか



「X」文を有する土器ほか



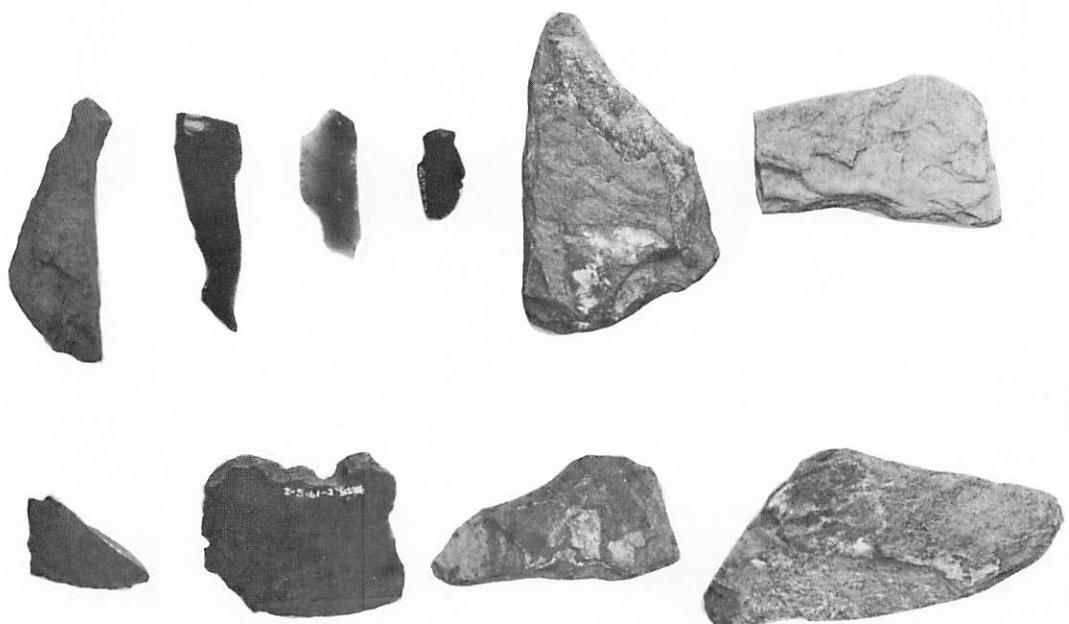
無文土器、土製品ほか



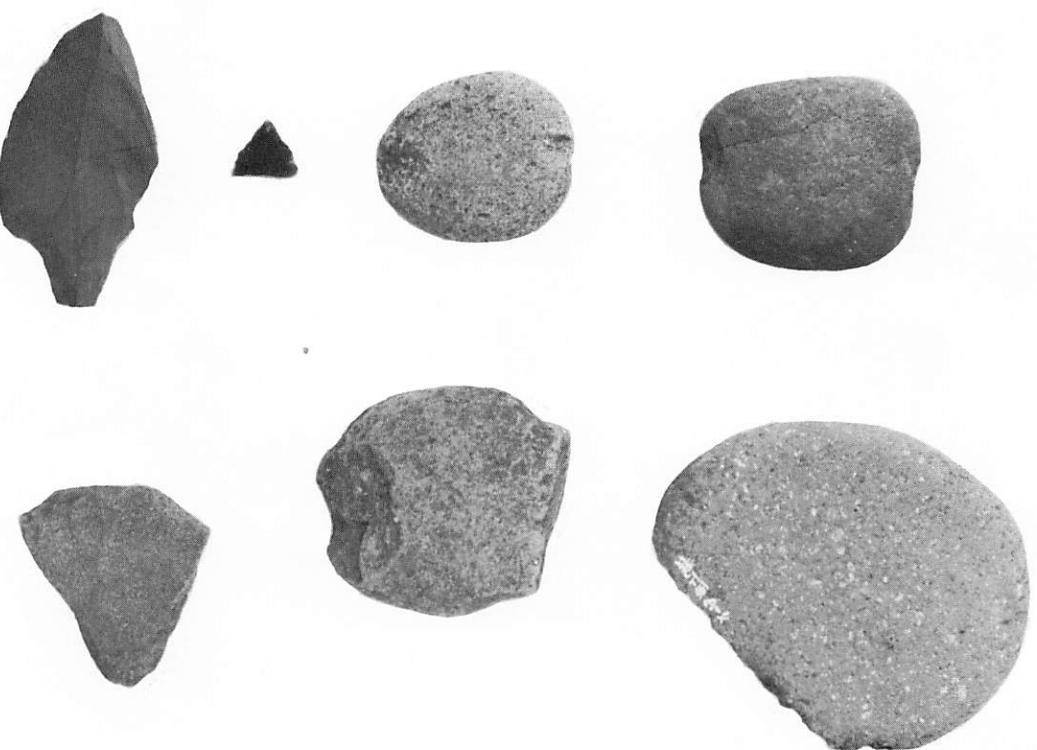
① 打製石斧



② 打製石斧



① 削器



② 尖頭器ほか

山鹿市立博物館調査報告書 第1集

城・下原遺跡

熊本県山鹿市大字城字下原所在・縄文時代後期遺跡の調査

昭和55年3月31日

編集 山鹿市立博物館

〒 861-05 熊本県山鹿市大字鍋田2085

発行 山鹿市教育委員会

〒 861-05 熊本県山鹿市堀明町1026-2

印刷 下田印刷

熊本支店 熊本市迎町1丁目4の16

T E L (0963) 54-9331



### 正誤表

『城・下原遺跡』 山鹿市立博物館調査報告 第1集 山鹿市教育委員会 1980年

頁	行	誤	正
1	7	(第14・15図)さらに、この周辺からは	(第12・13図)さらに、この周辺からは
35	15	(第28図211・212)。	(第26図211・212)。
36	3	その際出土したのが第29図の土器で、	その際出土したのが第27図の土器で、
36	5・6	城・下原遺跡より南へ約2km、東鍋田遺跡より北へ約0.5kmの位置にある。(第1図8)	城・下原遺跡より南へ約1.2km、東鍋田遺跡より北へ約0.6kmの位置にある。(第1図5)
44	22	城・下原遺跡の南1kmに在る	城・下原遺跡の南1.8kmに在る
46	7	和の認識の足らなさかも知れないが	私の認識の足らなさかも知れないが

## 文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第1集 城・下原遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市立博物館調査報告第1集 城・下原遺跡

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年 6 月 26 日